

ISSN 2186-6198

(オンライン版) ISSN 2186-6201

言語文化教育

JATLaC Journal No. 10

通巻第 10 号

2015

JATLaC 言語文化教育学会

The Japan Association of Teaching Language and Culture

言語文化教育

JATLaC Journal No. 10

通巻第 10 号

(旧誌名：言語文化教育研究)

目 次

会員投稿論文	3	～	19
高橋 麻帆（ハワイ大学）	4-19		
<u>動詞の再構築とイベント項</u>			
理事投稿論文	20	～	41
中井 基博（東京国際大学）	21-36		
<u>The female title Ms. in Junior High School English Textbooks in Japan</u>			
生井 健一（早稲田大学）	37-52		
<u>目的節の統語範疇と機能について</u>			
第 15 回大会記録	53	～	55
《個人発表記録》			
金 台永（早稲田大学大学院）	54-57		
<u>韓国語の属格助詞「ui」の随意性</u>			
尾崎 友泉（早稲田大学大学院）	58-61		
<u>日本語母語話者による英語発話リズム—J-AESOP コーパスをもとに—</u>			
富田 卓馬（早稲田大学大学院）	62-65		
<u>日本語の単純語短縮と情報伝達部分の「長さ」</u>			
萩原 伸一郎（愛知県立尾西高校・津島高校）	66-69		
<u>「遠近」の概念に基づくメタファー表現の分析</u>			
(発表順)			
2015 年度活動記録	71	～	73
言語文化教育学会紹介	74	～	78
学会よりお知らせ	79	～	80

會員投稿論文

1. はじめに

隣接する複数の語を統語上で一つの語として解釈し直すことを「再構築」(Restructuring)といい、多くの言語でその存在が確認されている。日本語では目的節「～(し)に」(Purpose Clause, 以降 PC)と動名詞節「～(し)て」(Gerundive Clause, 以降 GC)を含む文において、この再構築が行われているとの分析がなされてきた(e.g. Miyagawa 1987; Matsumoto 1991)。

- (1) a. [太郎が_{PC} PRO 本を買いに]行った]。
- b. [太郎が_{GC} PRO 本を買って]来た]。

Miyagawa (1987)は、何らかの理由で従属節内の語と主節の語が結び付く必要がある場合、(1)のような文は以下のように複文から単文に再構築されると論じる。

- (2) a. 太郎が本を_v買いに行っ]た。
- b. 太郎が本を_v買って来]た。

(2)において、(1a)の PC 内の動詞「買いに」と(1b)の GC 内の動詞「買って」が主節の動詞と再構築を起こし、それぞれ「買いに行っ(た)」「買って来(た)」という一つの動詞になっているという。

一方で、この再構築はあくまでオプショナルな操作であると Miyagawa は主張する。再構築が常に行われるならば、以下のような文の照応関係が説明できなくなるからである。

- (3) (=Miyagawa の(37), p.284)

太郎が花子_iと(一緒に)大学に彼女_{ij}を紹介しに行った。

PC を含む(3)が必ず再構築によって単文になるならば、代名詞「彼女」が花子を指すことは束縛理論 B の違反になるはずである(Chomsky 1981)。

- (4) 束縛理論 B

代名詞は同節内(厳密にはその統率範疇内)に先行詞があってはいけない。

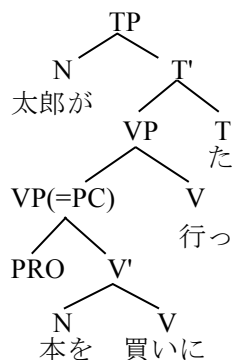
しかし(3)は「彼女」が花子を指しても問題ないため、複文の構造を保っているといわざるを得ない。よって Miyagawa は再構築は強制的なものではないという結論に達する。Tsuji-mura 1993(以降 T)もまた、この再構築の分析を支持している。だが一方で、PC と GC は付加語によって修飾され得るかどうかという点で異なっており、その違いは PC の「に」と GC の「て」

という二つの形態素に起因すると論じる。それだけでなく、この二つのタイプの節は統語上でも違いが見られると主張する。

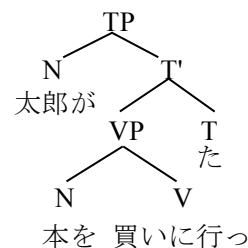
しかしながら、T 1993 はいくつかの問題をはらんでおり、本稿はそれらを指摘するものである。具体的には PC と GC を含む文における再構築(つまり(2)の分析)を支持するかたわら、PC と GC の違いに関しては再構築の行われない複文構造(= (1)の分析)に根拠を見出す主張に一貫性がないことを示す。従って、PC と GC に T が指摘する違いはないとし、どちらのタイプの節も同様に以下のような再構築が行われていることを確認する。¹

(5)

a.



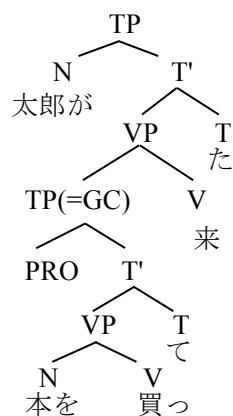
b.



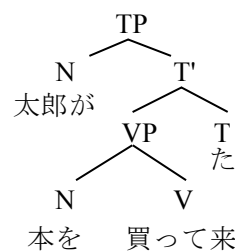
再構築

(6)

a.



b.



再構築

2. Tsujimura 1993

2.1 再構築

T は、PC および GC における再構築の根拠として二つの語彙項目のライセンスを挙げている。第一に、否定極性表現「しか」のライセンスである。「しか」を含む PC および GC の例を以下に提示する。

¹ セクション 2.3 で詳述する通り、T は PC は時制素性[±Tense]を持たず、一方 GC には[·Tense]が備わっているとする。そのため(5)、(6)における PC および GC はそれぞれ VP、TP として表す。

(7) (=T の(5), (6), p.123)

- a. 太郎が神田に[_{PC} 本しか買いに]行かなかった。
- b. 太郎が[_{GC} 日本の映画しか見て]来なかった。

否定極性表現には、同じ節内の否定辞によってライセンスされなくてはならないという同節内仲間制約(Clausemate Condition)が課されている。(7a,b)が複文の構造を保ったままだと、この仲間制約の違反になり、(8)と同様非文となるはずである。

(8) (=T の(4), p.122)

- a. *花子が[太郎が魚しか食べる]と言わなかった。

よって(7a,b)は再構築によって以下のように単文になっており、「しか」がきちんとライセンスされるので適格文になると T は分析する。

- (9) a. 太郎が神田に本しか[_v 買いに行か]なかった。
- b. 太郎が日本の映画しか[_v 見て来]なかった。

第二に、主格目的語のライセンスにも再構築が必要であると T は考える。日本語の目的語は、形態素「(ら)れ」が動詞に付加している場合に、主格「が」を伴うことができる。以下の例を見てみよう。

- (10) a. 太郎が英語を/*が話す。
- b. 太郎が英語を/が話せる。

(10)に見られるような主格目的語も「しか」と同様、異なる節の「(ら)れ」によってライセンスされることができない(=同節内仲間制約)。よって以下の文は非文法的である。

(11) (=T の(10), p.123)

- *田中さんに[_{PRO} 中華料理が明日作るか]聞けますか？

一方、主格目的語が PC および GC 内に生起する(12)の文は適格である。

(12) (T の(11), (12), p.124)

- a. 田中さんの息子は一人で[_{PC} 映画を/が観に]行けます。
- b. 田中さんの息子は一人で[_{GC} 映画を/が観て]来れるの？

従って(12)の例でも再構築が行われ、「(ら)れ」と「が」が同節内仲間制約を満たしているはずである。

- (13) a. 田中さんの息子は一人で映画を/が[_v観に行け]ます。
 b. 田中さんの息子は一人で映画を/が[_v観て来れる]の？

このように、(7)と(12)の例から、Tは日本語のPCおよびGCを含む文にも再構築が観察されると主張した。

2.2 付加語の選択

TはPCとGCを含む文における再構築の例を示した後、二つのタイプの節の相違点についての説明に移行する。そして付加語(副詞的修飾語)はPCを含む文ではPCの外の主節動詞に、GCを含む文ではGC内の動詞にそれぞれかかると分析する。その根拠として、(i)場所および方向を表す付加語(Locative Adjuncts)、(ii)提携および随伴を表す付加語(Comitative Adjuncts)、(iii)手段や道具を表す付加語(Instrumental Adjuncts)、そして(iv)描写述語(Depictive Predicates)について検証している。

まず第一に、(i)場所および方向を表す付加語の例から見てみよう。

(14) (=T の(13) p.125)

- a. 太郎が図書館へ漫画しか借りに行かなかった。
 b. *太郎が図書館で漫画しか借りに行かなかった。

(15) (=T の(14), p.126)

- a. 太郎が図書館で漫画しか借りて来なかった。
 b. *太郎が図書館から漫画しか借りて来なかった²。

(14)、(15)の文はいずれも否定極性表現「しか」を含んでいることから、Tはこれらの文では再構築が起きているとする。まずPCを含む(14)から見てみよう。(14a,b)の文法性の違いは、付加語が主節動詞にかかると分析をすることによって説明できる。(14a)の「図書館へ」と(14b)の「図書館で」は、それぞれ主節動詞「行かなかった」を修飾するとすれば、「図書館へ行かなかった」といっても「*図書館で行かなかった」とはいえないことから、修飾関係の成り立つ(14a)は適格文、そうでない(14b)は非文になる。

次にGCを含む(15)を見てみよう。GCを含む文の付加語はGC内の動詞にかかるとすると、(15a)の「図書館で」と(15b)の「図書館から」はいずれも「借りて」を修飾することになる。Tは、「図書館で借りて」は問題ないが「*図書館から借りて」とはいえないため、(15b)は非文法的であると説く。

第二に、(ii)提携および随伴を表す付加語の例を以下に示す。

(16) (=T の(15), p.126)

² Tは「図書館から借りて」という表現を非文法的と判断するがゆえに(15b)を非文とするが、セクション3.1で詳しく述べる通り、この例文は筆者の判断では適格文である。

太郎が（東京へ）本しか花子と買いに行かなかった。

(17) (=T の(16), p.127)

太郎が寿司しか花子と食べて来なかった。

(16)と(17)では「花子と」の解釈に差が出てくる、と T は主張する。すなわち、PC を含む(16)では付加語「花子と」が主節動詞「行く」にかかるため、「本と一緒に買ったかどうかはわからないが、(東京への)移動を花子と共にした」という解釈になるという。一方 GC を含む(17)で付加語が修飾しているのは GC 内の動詞「食べる」であるため、「花子と寿司を食べたが、一緒に戻って来たとは限らない」と解釈されるというのだ。

第三に、(iii)手段や道具を表す付加語である。以下の例を見てみよう。

(18) (=T の(17), p.127)

太郎が花子の眼鏡しか自転車で壊しに行かなかった。

(19) (=T の(18), p.127)

太郎が花子の眼鏡しか自転車で壊して来なかった。

提携および随伴を表す付加語の例と同様に、PC を含む(18)と GC を含む(19)では「自転車で」の修飾対象が異なると T は考える。前者では主節動詞、後者では GC 内の動詞を修飾するので、(18)においては眼鏡を壊しに行く際の交通手段、(19)においては眼鏡を壊す道具として解釈されるという。

最後に、(iv)描写述語の例を見てみよう。以下の 2 文を参照されたい。

(20) (=T の(19), p.128)

太郎が次郎しか裸で殴りに行かなかった。

(21) (=T の(20), p.128)

太郎が次郎しか裸で殴って来なかった³。

T によると、(20)と(21)では太郎と次郎のどちらが裸なのかが異なるという。PC を含む(20)においては描写述語「裸で」が主節にかかるため、裸なのは主節動詞の動作主である太郎である。一方 GC を含む(21)において「裸で」は GC 内で機能するため、裸なのは GC 内にある次郎ということである。

以上に見られる相違点から、T は PC と GC は再構築が見られるという点で類似しているが、両者は統語上区別されるべきだと結論付けた。

³ 筆者の判断では、(20)と同様(21)でも「裸なのは太郎」という解釈をするほうがはるかに自然である。このことについてはセクション 3.1 で詳述する。

2.3 イベント項

T は、前セクションで示した PC と GC の違いは、イベント項の存在の有無に起因すると提案する。このイベント項について T はまったく説明をしていないが、本来「イベント」とは意味論上の概念であり、動詞はイベント項が備わってはじめて一人前のイベントとしてみなされるということを主張したいのだと思われる。つまり付加語(描写述語を含む)は、イベント項を持ち、一人前のイベントを構成する動詞しか修飾できないということだ。PC 内の動詞にはイベント項がないと仮定すると、付加語は常に PC 外の主節動詞にかかると解釈される。一方 GC 内の動詞はイベント項を持つとすれば、付加語は GC 内の動詞を修飾できることになる。

さらに T は、イベント項の有無を目的形態素(Purpose Morpheme)「に」と動名詞接尾辞(Gerundive Morpheme)「て」に時制の素性([±Tense])が備わっているかどうかに関与する、と規定する。目的形態素「に」は時制素性そのものを持たないが、動名詞接尾辞「て」は時制素性[-Tense]を持っているというのである。時制の素性がそもそもないことと[-Tense]の素性を有することの違いは、小節(Small Clause, SC)と例外節(Exceptional Clause, EC)の対比と同等ということだろう。以下の例を参照されたい。

- (22) a. I consider [_{SC} him reliable].
 b. I consider [_{EC} him to be reliable].

(22a)の SC には動詞がなく、よって[±Tense]も存在しないことがわかる。一方(22b)には不定動詞 *to be* があり、これが[-Tense](すなわち不定詞)の素性を持つため EC は(マイナスであるにせよ)時制素性を持つことになる。

(20)と(21)の例をもう一度見てみよう。描写述語「裸で」が一人前のイベントとしか共起できないと仮定すると、(20)と(21)において裸である者に違いが出る理由が説明できる、と T はいう。PC を含む(20)においては、「に」に[±Tense]素性がないためイベント項が認められず、描写述語も PC 内で機能することができない。一方明らかに過去形である主節動詞「行かなかった」には[+Tense]が備わっており、イベント項を持つため描写述語はこの動詞にかかることになる。そして、主節動詞の主語は太郎なので、裸なのは太郎という解釈が得られる。翻って、GC を含む(21)においては、「て」が[-Tense]を持つことからイベント項が認められ、描写述語は GC 内で機能することができる。従って(21)で裸なのは GC 内の次郎となる。ただし、GC を含む文では主節動詞も[+Tense]を持つため、注意する必要がある。従属節である GC 内の動詞と主節動詞がどちらも時制素性[±Tense]を持っているならば、なぜ描写述語は後者にかかることができないのだろうか。

この疑問に対し、T は Napoli (1982)の分析を採用する。Napoli によると、イタリア語の再構築現象においては、主節動詞が従属節動詞に対する「意味上の助動詞」(Semantic Auxiliary)と化すという。以下の二文を参照されたい。

(23) (=T の(23), p.132)

- a. Piero verra in biblioteca a parlati di parapsicologia.
will come to the library to speak to you about parapsychology
'ピエロは超心理学についてあなたと話をするために図書館に来るだろう。'
- b. *Piero ti verra in biblioteca a parlare di parapsicologia.

(23a)において、英語の *to you* にあたる接語(clitic) *ti* は従属節動詞 *parla* に付加している。一方(23b)では *ti* が接語移動を起こし、*verra* の接頭辞になっているが、Napoli がいうように主節動詞 *verra* が再構築で助動詞と化すならば、もはや一人前の述語ではないので、接語のホストにはなれない。よって(23b)は非文となるというのだ。T はこの分析を日本語にも当てはめ、主節動詞は再構築を通して意味上の助動詞に格下げされるため、イベント項も失うと説明する。従って付加語は常に GC 内で機能するということになる。

2.4 統語論的相違点

T は PC と GC の統語上の違いとして、前者を項、後者を(セクション 2.3 で見たように)「来る」等の意味上の助動詞に後続される動詞であると主張する。その根拠として、以下の二つの例を挙げている。

第一に、PC はかき混ぜ操作(Scrambling)によって文頭に動かすことができるが、GC はできないという。

(24) (=T の(24), p.132)

[_{PC} 本を買いに]_i 太郎が神田へ *t_i* 行った。

(25) (=T の(25), p.133)

*[_{GC} 神田で本を買って]_i 太郎が *t_i* 来た。

(24)における PC は動詞「行った」の項であり、動詞によって意味役割(θ -role)を与えられている。なので、かき混ぜ操作によって移動させてもその痕跡(trace, *t*)から意味役割がわかるので(専門的には「痕跡が意味役割統率(theta-govern)」されているので)、適格文となる。一方(25)における主節動詞「来た」は再構築後に助動詞に格下げされるので、GC 内の動詞「買って」が述語の主部である。つまり、GC は再構築を経て動詞句となっているので、項である「太郎が」および「本を」に意味役割を与える側であり、受け取る側ではない。従ってこの動詞を含む GC を移動させると、その痕跡が意味役割統率されず、(25)は非文法的となる。

また、移動の際助動詞を元の位置に置き去りにしてはならないという制約も存在すると T は主張する。以下の例を参照されたい。

(26) (=T の(28), p.134)

- a. 太郎が花子に本を買ってあげた。

- b. *[花子に本を買って]_i 太郎が _{t_i} あげた。

(27) (=T の(29), p.134)

- a. 私は明日病院へ行くつもりです。
b. *[明日病院へ行く]_i 私は _{t_i} つもりです。

(28) (=T の(30), p.134)

- a. 太郎はもう家へ帰ったはずだ。
b. *[もう家へ帰った]_i 太郎は _{t_i} はずだ。

(26)から(28)の例に見られる「あげた」「つもり」「はず」は全て助動詞として機能していると T は主張する。そして b の例がいずれも非文であることから、かき混ぜ操作の際、助動詞は置き去りにできないと結論付ける。従って GC を含む文においても、再構築を経て意味上の助動詞になった主節動詞を残して GC を移動させられないことになり、(25)の非文法性の説明がつくと T は考える。

第二に、PC は文中に繰り返し登場させることができないが、GC はできる、と T は主張する。項は動詞から必ず一つの意味役割をもらわなくてはならないが、動詞が与える意味役割の数は限られている。よって項は以下の例で示すように、文中に必要以上に出すことができない。

(29) *太郎は朝食にリンゴをみかんを食べた。

動詞「食べる」が持つことのできる目的語（つまり内項）の数は一つであり、二つ目的語の存在する(29)のような文は非文法的である。

一方、付加語は項と違って動詞から意味役割を付与されないため、その数に制約はない。(30)は適格文だが、複数の付加語を伴っていることに注意されたい。

(30) 太郎は朝 8 時、朝食に、ベッドの上で、TV を見ながら、次郎とリンゴを食べた。
(下線：付加語)

以上を踏まえて、PC と GC の例を見てみよう。

(31) (=T の(26), p.133)

*太郎が新宿へ[_{PC} 本を買いに]、[_{PC} 寿司を食べに]、[_{PC} 映画を観に]行った。

(32) (=T の(27), p.133)

太郎が新宿で[_{GC} 本を買って]、[_{GC} 寿司を食べて]、[_{GC} 映画を観て]来た。

(31)における PC が項だとすると、動詞から必ず一つの意味役割をもらわなくてはならない。だが意味役割の数は限られているため、PC はいくつも並べることができない。一方(32)における GC は項ではないため、いくらでも並べることができる。(31)が非文であり、(32)が適格文であるのは、この違いによるというのである。

以上の理由により、T はイベント項の有無の他に、PC は主節動詞の項である一方、GC はメインの動詞句、という統語上のステータスの違いもあるという結論に達した。

以上が T 1993 の要諦である。

3 疑問点

T は否定極性表現「しか」および主格目的語のライセンスのためには、PC および GC を含む文の再構築が不可欠であるとした。しかしこの主張が T 1993 を通じて一貫しているとはいえないことを以下に示す。

3.1 付加語

T は PC、GC を含む文に再構築が見られると主張する一方で、セクション 2.2 に示した通り、二つのタイプの文は付加語が主節と従属節のどちらの動詞を修飾するかが異なるとした。(14a)、(15a)を再録した(33)を参照されたい。

(33) (=T の(13a),(14a), p.125-126)

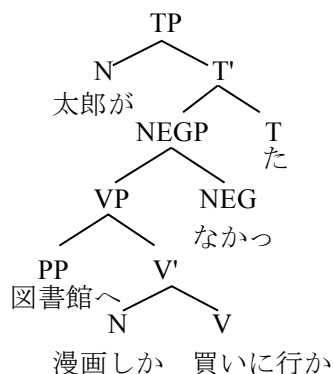
- a. 太郎が図書館へ漫画しか借りに行かなかった。
- b. 太郎が図書館で漫画しか借りて来なかった。

(33a)の付加語「図書館へ」は主節動詞「行く」に、(33b)の「図書館で」は GC 内の動詞「来る」にそれぞれかかる、と T は分析した。

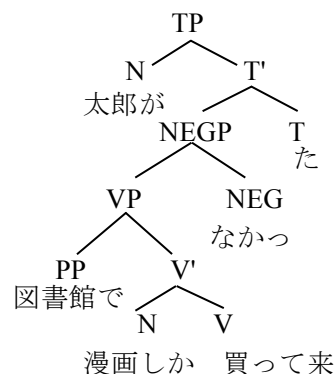
だが、もし T のいう通り(33a,b)で再構築が行われているとすれば、PC、GC 内の動詞と主節動詞は合体して「借りに行く」「借りて来る」という一つの動詞になっているはずである。(33a,b)の再構築後の構造を以下に図示する。

(34)

a.



b.



(34)で示した通り、二つの動詞が一つになってしまえば、付加語「図書館へ」および「図書館で」が修飾するものが主節動詞なのか従属節動詞なのかという問い自体が不可能になるはずである。よって(33)に関する T の分析は、同じく彼女が主張する再構築と矛盾している。

また、付加語に関する T の主張は経験的にも難点がある。まず場所および方向を表す付加語に関して、(15b)を再録した(35)を見てみよう。

(35) (=T の(14), p.126)

*太郎が図書館から漫画しか借りて来なかった。

T は(35)を非文と判断しているものの、この文は多くの日本語話者にとってごく自然に聞こえるであろう。実際、「図書館から本を借りる」のような表現は広く使われており、非文であるとは言い難い。よって「GC を含む文における付加語は GC 内の動詞を修飾する」という点を明白にしたいのなら、T は次のような文を提供すべきであろう。

(36) 太郎が[_{GC} *吉野家から/吉野家でカレーしか食べて]来なかった。

T の分析では(36)の付加語「吉野家から」は GC 内の「食べて」を修飾することになるが、確かに「*吉野家から食べる」とはいえない。しかしこの文でも再構築が起こっているのだから、「吉野家から」が修飾するのは「食べて来る」であるはずだ。そうすると「吉野家から」を使った場合に(36)が非文になるのは、「食べて来る」が「～から」と共起できないためと考えべきである。この点に関し、以下の例を参照されたい。

(37) 花子が[_{GC} 給湯室から湯のみしか洗って]来なかった。

(37)は適格文であるが、T の主張に基づき付加語「給湯室から」が GC 内の動詞「洗う」にかかっているとすると、「*給湯室から洗う」とはいえないため、非文という判断になってしまふ。よって(37)が適格なのは、再構築によって「洗って来る」という動詞が作られ、それが「～から」と共起できるためだといえる。各動詞に対する付加語が意味的に共起できるものとできないものに分けられることは、以下の英語の例からも明らかである。

- (38) a. John danced in the living room.
b. *John danced from the living room.

なので(36)の非文法性も、再構築後の動詞「食べて来る」が「洗って来る」とは異なり、「～から」と意味的に共起できないためだとすると説明がつく。よって(36)のような例をもってしても、付加語が GC 内の動詞のみを修飾しているとはいえない。

問題はこれだけではない。提携および随伴を表す付加語に関し、以下のような例文を見よう。

- (39) 太郎が_{GC}本棚しか花子と運んで]来なかった。

T の分析によると、(39)は GC を含む文なので付加語「花子と」は「運ぶ」のみを修飾し、「花子と一緒に本棚は運んだが、そのまま一緒に戻って来たとは限らない」という解釈になる。しかし(39)の場合、「太郎と花子が本棚を持って一緒に戻って来た」と解釈するほうがより自然であろう。よって、一緒に戻ってきている以上、「花子と」が主節動詞にかかっていることになるが、これは T の分析と相容れない。

また、描写述語に関して T の例示していた(21)を以下に繰り返す。

- (40) (=T の(20), p.128)

太郎が_{GC}次郎しか裸で殴って]来なかった。

(40)において「裸で」は GC 内で機能している、つまり裸なのは GC 内にある次郎だと T が判断したのは前述の通りである。だがこの解釈は筆者にとって非常に不自然だといわざるを得ない。GC を使った(40)においても、やはり裸なのは太郎であると解釈するほうがはるかに一般的ではなかろうか。

そして、T の分析にとって最も致命的といえるのが以下の例である。

- (41) a. 太郎が_{GC}寿司を花子としか食べて]来なかった。
b. 太郎は_{GC}花子の眼鏡を素手でしか壊して]来なかった。

(41)は付加語に「しか」が付属している例である。セクション 2.1 で述べた通り、「しか」は同じ節内の否定辞によってライセンスされなくてはならない(i.e. 同節内仲間制約)。ただし T の分析が正しければ、GC 内の付加語「花子としか」「素手でしか」は同じ節内の動詞にのみかかることとなる。GC 内の動詞「食べて」および「壊して」は否定辞を伴わないため「しか」のライセンスが行われず、結果(41)は非文となるはずである。しかしこれは事実と反するため、T の分析は成立しない。

さらに、T は (i)場所および方向を表す付加語、(ii)提携および随伴を表す付加語、(iii)手段や道具を表す付加語、そして(iv)描写述語を用いて PC と GC の違いを論じたが、例えば時を表す付加語(Temporal Adjuncts)を用いた場合はどうか。以下にその例を示す。

- (42) *太郎は_{GC}寿司を昨日食べて]来る。

GC を含む(42)は明らかに不適格だが、それは主節動詞「来る」が現在時制であり、付加語「昨日」と時制の不一致を起こすためである。しかし T によると付加語は GC 内の時制素性[-Tense]

を持つ「て」を伴った動詞のみにかかるため、主節動詞の時制は無関係なはずだ。よって T の分析では、(42)が非文となる説明が付かない。ちなみに、(42)と同様に GC を使った英文は適格になることにも注目されたい。

(43) I remember [_{GC} seeing you yesterday].

(43)では、主節の動詞 *remember* が現在時制であることから、時を表す付加語 *yesterday* は動名詞 *seeing* のみを修飾しているとわかる。T の主張する通り、(42)の「寿司を(昨日)食べて」が GC だとするならば、類似する構造を持つ(43)と同じく(42)も適格となるはずだろう。

3.2 イベント項

セクション 2.3 で示した通り、GC 内の動詞は PC 内のそれとは異なりイベント項を持つため、付加語は GC 内の動詞を修飾すると T は説いた。そしてこれは GC 内の動名詞接尾辞「て」は時制素性[-Tense]を持ち、一方 PC 内の目的形態素「に」には時制素性が存在しないことによるとした。

しかし、すでに触れたように、そもそもこのイベント項の定義が不明瞭である。繰り返すが、「イベント」は意味論上の概念であり、それが統語上にどのような形で反映されるのか、そしてどのように付加語による修飾を可能にするのか、一切説明がない。

また、(40)を再度見てみよう。GC 内の「殴る」は二項述語(Two-place Predicate)であり、「殴る人」と「殴られる人」の二つの意味役割(Agent, Patient)を与える動詞である。従って、これらの意味役割を受け取る項が GC の中に二つ存在することになるので、主語項として、空範嚆代名詞 PRO があるはずだ。この点を踏まえると、(40)は以下のように分析される。

(44) (= (40)) 太郎_iが[_{GC} PRO_i 次郎しか裸で殴って]来なかった。

(44)における PRO のコントローラー（すなわち、先行詞）は太郎である。T は描写述語「裸で」は GC 内で機能するとしたが、(44)を見ると、GC の中に次郎だけでなく太郎と同一の指標を持つ PRO も存在することがわかる。よって GC を含む文においても「裸で」は太郎を指すことができしかるべきであり、実際に前述の通り、この文で裸なのは太郎と解釈するほうが自然である。さらに、T は「裸で」は必ず次郎を指すと主張するが、なぜ主語の PRO ではなく目的語の次郎の描写にしかならないのか、まったく説明されていない。

さらに PC と GC の違いは、「に」と「て」のイベント項の有無であると T はいう。イベント項の有無によって付加語が修飾できる動詞が変わるという分析であるが、この分析は主節動詞と従属節動詞の存在、すなわち主節と従属節の存在を前提にしている。しかし、この前提は T 1993 のメイン・ポイントである再構築分析((5), (6)参照)を真っ向から否定するものであり、T の論旨に大きな矛盾があることを示唆するものである。

3.3 統語論的相違点

セクション 2.4 で述べた通り、T は PC は項、GC はそうでなく動詞句だと論じた。この主張に関して、問題が指摘できる。もし PC が項ならば、以下のような文の文法性はどのように説明されるのだろうか。

(45) 太郎が神田へ(本を買いに)行った。

PC「本を買いに」を省略したとしても、(45)は独立文として何ら差し支えないだろう。だが PC を項とすると、動詞「行く」は三項述語(Three-place Predicate)ということになり、必ず PC にも意味役割を与えなくてはならなくなる。PC が省略されるとそれが受け取るべき意味役割(PURPOSE?)の付与が不可能になるので、(45)は以下のような文と同様、非文となるはずである。

(46) 太郎が*(本を)テーブルに置いた。

(46)で目的語「本を」を省略すると、三項述語「置く」の持つ意味役割の一つ(Theme)が与えられないからだ。よって(45)の文法性は、T の分析に対する明確な反証となる。

次に、GC は助動詞と化した主節動詞を置いて移動できないという T の主張の根拠を改めて見てみたい。(26)～(28)の例を以下に(47)～(49)として繰り返す。

(47) (=T の(28), p.134)

- a. 太郎が花子に本を買ってあげた。
- b. *[花子に本を買って]_i 太郎が _{t_i} あげた。

(48) (=T の(29), p.134)

- a. 私は明日病院へ行くつもりです。
- b. *[明日病院へ行く]_i 私は _{t_i} つもりです。

(49) (=T の(30), p.134)

- a. 太郎はもう家へ帰ったはずだ。
- b. *[もう家へ帰った]_i 太郎は _{t_i} はずだ。

T は(47)から(49)の例に見られる「あげた」「つもり」「はず」を助動詞としたが、以下に挙げる二点が疑問として残る。

第一に、(48)と(49)に関して、「つもり」「はず」といった表現は(50)のような言い換えが可能である。

- (50)
- a. つもり＝予定、計画、所存
 - b. はず＝頃、時間

つまり、「つもり」「はず」は名詞と言い換えられることから、これらを助動詞と見なすのは疑わしいといえる。少なくとも統語範疇は名詞であろう。よって「つもり」「はず」を動詞である「来る」と比較することは妥当でない。

第二に、(47)に関しては、「あげる」が明らかに動詞であるため「来る」との比較は的外れではない。だが以下のように、「あげる」を文中に残すことができる例も存在する。

(51) お前に本など買ってなんて、絶対、あげるものか。

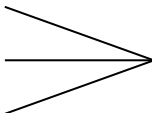
従って、(47)~(49)をもって、GC がかき混ぜ操作などの移動を起こせないと論じるのは早計である。

また、項である PC と違い、GC はいくらでも文中に出せるという T の主張の裏付けとなった(32)を以下に再録する。

(52) (=T の(27), p.133)

太郎が新宿で[GC 本を買って]、[GC 寿司を食べて]、[GC 映画を観て]来た。

T は(52)において、三つの GC 「本を買って」「寿司を食べて」「映画を観て」が等位接続されていると考える。だが、この分析のもとでは、筆者には(52)の容認性が低いように思われる。(52)における等位接続の構造を図示すると、以下のようになるだろう。

(53) [GC 本を買って]  来た
 [GC 寿司を食べて]
 [GC 映画を観て]

この分析によると、「来た」は三つの GC にかかっており、「本を買って来た」「寿司を食べて来た」「映画を観て来た」という解釈がそれぞれ成り立つべきである。

一方、(52)は別の構造が元になっていると考えることができる。すなわち、この文では三つの動詞句「本を買う」「寿司を食べる」そして「映画を観て来る」が以下のように等位接続されているのである。

(54) [VP 本を買う] and [VP 寿司を食べる] and [VP 映画を観て来る]

この分析では、「来る」は再構築を経てできた一つの動詞「観て来る」の一部であり、「本を買う」「寿司を食べる」にはかからないため、「本を買って寿司を食べた後に映画を観て来た」という解釈になる。そして筆者には、(54)の構造を元にしたこの解釈のほうが自然だと思われるのである。つまり(52)は、以下の(55)と同じ構造をもつということだ。

(55) 太郎が新宿で、金をおろして、パチンコをして、(うちへ)景品を持って来た。

(56) [VP 金をおろす] and [VP パチンコをする] and [VP (うちへ)景品を持って来る]
 withdraw play bring

また、項とされる PC に関してだが、たとえ項でなくても文中に複数出せない場合がある点も指摘しておきたい。まず、T が文中で引用した Larson (1988) の例を見てみよう。

Fred deftly [MANNER] handed the toy to the baby by reaching behind his back [MANNER] over lunch [TEMP] at noon [TEMP] in Back Bay [LOC]

(58) a. He may have quit that terrible job. (法助動詞+完了助動詞)
b. *He may should quit that terrible job. (法助動詞+法助動詞)

(59) a. *John ran slowly [MANNER] carefully [MANNER].
b. John ran slowly [MANNER] with care [MANNER].

18

タイプおよびサブタイプが同じものは無制限に使えないことがわかる。この点からすると、(31) (以下に(60)として再録) における三つの PC は、意味的にも (i.e. 目的節)、統語範疇の観点からも (i.e. *clauses headed by* に) 同一なので非文となると考えられる。

(60) *太郎が新宿へ[_{PC} 本を買いに]、[_{PC} 寿司を食べに]、[_{PC} 映画を観に]行った。

よって、無制限に使えないからといって、PC が項でないとは限らないのである。

4. 結論

T は PC と GC を含む文における再構築を主張する一方で、二つのタイプの節は付加語の修飾する動詞が主節か従属節かで異なるとした。そして、この違いは結局のところ「に」と「て」のイベント項の有無に収斂されると結論付けた。しかし上に見たように、再構築が行われているならば主節と従属節の動詞は一つになり、その中での主節動詞/従属節動詞の区別はなくなるはずである。また、再構築の下ではイベント項によって修飾される動詞が変わるということもできないだろう。よって T の主張はそれ自体で矛盾を起こしており、成立するとはいい難い。ただし、再構築現象そのものを否定するつもりはない。本稿の主張としては、再構築の結果、二つの動詞が一つになって単文を構成しており、再構築後の（複合）動詞が、独自に特定の付加語と共起できるようになるなどの特徴を持つという分析のほうが妥当性が高いとしておく。

参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris Publications.
- Larson, Richard (1988) "Implicit Arguments in Situation Semantics," in *Linguistics and Philosophy* 11(2), 169-201.
- Matsumoto, Yo (1991) "On the Lexical Nature of Purposive and Participial Complex Motion Predicates in Japanese," in *BLS 17: Proceedings of the 17th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 180-191. Berkeley: Berkeley Linguistics Society.
- Miyagawa, Shigeru (1987) "Restructuring in Japanese," in Imai, Takashi and Saito, Mamoru (eds), *Issues in Japanese Linguistics*, Dordrecht: Foris Publications, 273-300.
- Napoli, Donna Jo (1982) "Semantic Interpretation vs. Lexical Governance: Clitic Climbing in Italian," in *Language* 57, 841-887.
- Tsujimura, Natsuko (1993) "Adjuncts and Event Argument in Restructuring," in S.Choi (ed), *Japanese/Korean Linguistics 3*, Stanford: CSLI, 121-136.

理事投稿論文

The female title *Ms.* in Junior High School English Textbooks in Japan

NAKAI, Motohiro

Tokyo International University

I. Introduction

I.1 Purpose

The primal goal of this study is to investigate how the government-censored English textbooks for junior high schools in Japan deal with gender, focusing on the use of *Ms.*, one of the four honorific titles for people, by means of duplicating part of the precedent study (Nakai, 2005) which revealed a multitude of problems in the contemporary textbooks such as female invisibility, gender stereotypes, and sexist language use. Therefore, the present paper not only explores how the junior high school English textbooks currently used in Japan handle *Ms.* along with the other address terms but also examines how differently, better or worse, the newer version of the textbooks have changed in terms of gender representation compared with the older materials examined a decade ago.

I.2 Rationale

Since feminism and anti-sexist movements rose worldwide in the 1970s through the 1980s, gender in a socio-political term has always been one of the quite controversial but the most frequently discussed topics in our society. In Japan, for example, the national government realized the Equal Employment Opportunity Act in 1985 and the Basic Act for Gender Equal Society in 1999, which were quite substantial reforms, at least legally, in the pursuit of male-female equality (Naikakufu, 2012).

In the field of education, too, the national course of study or Gakushu-shidou-youryou (GSY, hereafter), issued by Ministry of Education, Culture, Science, and Sports, Technology (MEXT, hereafter) has carried out some changes in favor of gender fairness in the school subjects directly related to people and society; Home Economics, for example, began to be taught to both males and females at secondary schools in 1993 though it used to be compulsory only for girls (MEXT, 2006; MEXT, 2015).

In the subject of English, however, the contents do not explicitly show

such major changes. Then, a number of scholars investigated their contemporary English textbooks for junior and senior high schools in Japan and maintained that the gender representation of the examined materials is problematically male centered or sexist (Narisawa, 1992; Sasaki, 1994, Nakai, 1999; Nakai, 2000), arguing that such textbooks might cause much confusion among the young learners who used them. The problems they found were quite similar to those reported in the field of ESL (English as a Second Language), such as female invisibility or omission, gender stereotyped portrayal, and sexist language use (Hartman & Judd, 1978; Porreca, 1984, Sunderland, 1992; Lesikin, 1995). Among such gender-related problems, Sasaki (1994) claims that the use of *Ms.* symbolically indicates the degrees to which the male and female equality has been achieved in a given society.

Today, after the twenty years of ups and downs including the backlash to feminism in the early 2000s (Ueno, 2006), the importance of male-female equality and gender fairness based on the feminist ideology, especially the politically correct use of language, is better recognized in Japan than ever before. So, it seems very feasible to investigate how the current versions of the registered Japanese textbooks of English have improved in terms of *Ms.* treatment compared with the precedent study stated above. Then, hopefully, the examination of the current textbooks will lead us to a better understanding of the reality of our society's perception of gender as well as the reality of the English education in Japan.

I.3 Review of literature

I.3.i Gender and language

After Lakoff (1975) speculated on the characteristics of female speech style, a large number of scholars and practitioners have explored the relationship between gender and language in a wider variety of perspectives and have frequently caused a linguistic and political controversy over its application to society (Spender, 1980; Cameron, 1985; Nakamura, 1995). Among the often-discussed topics is language reform through which the advocates have attempted to improve people and society in the pursuit of male-female equality or gender fairness (Muggio, 1987; Ehrlich & King,

1992). Martyna (1983), for example, analyzes the dispute over the he/man issue, or a generic use of masculine words in English, and claims that the non-sexist language movement will degenderize languages and make society more egalitarian to all its members. As for the historical change of the use and function of English word *Ms.*, Barron (1986) argues that the English honorific titles reflect the instability of social structure and will continue to change.

I.3.ii Gender and education

With regard to gender and education, Fujita (1993) maintains that traditional education in itself presupposes the existing social structure and its authority and that gender issues are too complex and difficult to deal with. Kimura (2008) retraces the history of GSY in Japan and points out that it is difficult to develop gender-equality in education because it is interdisciplinary by nature.

In favor of gender equality in education, Gollnick, Sadker, & Sadker (1982) and Grossman & Grossman (1994) investigate classroom practices in ESL settings and both suggest that instructors play crucial roles. In the same light, examining the major elements of mainstream education in Japan including instructional materials, Ito et al. (1991), Fujita (1993), and Kimura (1999) point out “hidden curriculum” which unconsciously impedes achieving gender equity at school. In order not to reproduce gender-biases and stereotypes prevailing in society, Kishizawa (2000) claims five objectives of creating “gender-free” (p.173) environment at school, and she also proposes three practical approaches to producing gender-equal or non-sexist teaching materials.

I.3.iii Gender and English education

In the field of ELT (English language teaching), as stated above, Hartman & Judd (1978) and Porreca (1984) reveal a multitude of gender-related problems in ESL textbooks such as female invisibility or omission, gender stereotyped portrayals of characters, and sexist language use. Sunderland (1992) argues that “the English language itself and classroom processes”(p.81) are also where gender operates.

Similarly, quite a number of problematically unbalanced gender

representation were discovered in EFL materials in Japan (Narisawa, 1992; Sasaki, 1994; Nakai, 1999; Nakai, 2000; Nakai, 2001; Nakai, 2002; Nakai, 2005; Nakai, in process). Among them, Sasaki argues that the inconsistent use of the title *Ms.* in the registered textbooks causes much confusion of the learners' understanding of the word as well as society.

I.3.iv Gender today

After these twenty years of feminist challenges to the social framework, recent studies on EFL instructional materials report contradictory results. Togano (2009) claims that MEXT-approved high school textbooks still show gender imbalances such as female invisibility and gender stereotypes in occupations and activities. On the other hand, Pihlaja (2008) maintains that the Japanese high school textbook he evaluated “provides clear positive presentations of men and women” (p.9). Nakai (in process) also reports a very complicated and mixed reality of the gender treatment in the registered senior high school textbooks of English currently used in Japan: They show some improvement such as less gender stereotyped portrayals of the main characters, both male and female while the same materials include still androcentric or male chauvinistic representation of gender.

II. Method

II.1 Materials

The textbooks to examine here are eighteen junior high school English textbooks currently, as of 2015, used in Japan. They are all Kentei-kyoukasho, produced according to the national course of study or GSY, censored, and approved by MEXT. Among them, three books under the same title, for example, New horizon English course 1, 2, and 3, are designed to be used successively as a series; 1 in the first year, 2 in the second, and 3 in the third. Following is the list of examined textbooks.

Columbus 21 English course 1 (CL1)

Columbus 21 English course 2 (CL2)

Columbus 21 English course 3 (CL3)

New crown English course 1 (NC1)

New crown English course 2 (NC2)

New crown English course 3 (NC3)
New horizon English course 1 (NH1)
New horizon English course 2 (NH2)
New horizon English course 3 (NH3)
One world English course 1 (OW1)
One world English course 2 (OW2)
One world English course 3 (OW3)
Sunshine English course 1 (SS1)
Sunshine English course 2 (SS2)
Sunshine English course 3 (SS3)
Total English course 1 (TT1)
Total English course 2 (TT2)
Total English course 3 (TT3)

II.2 Data collection & procedures

In order to investigate how the current instructional materials for teaching English deal with gender, the female title, *Ms.* and the other honorific titles to people such as *Mr.*, *Mrs.*, and *Miss* are picked out of the eighteen books and categorized under the headings of their own. Then, the data is processed in three ways.

First, in order to examine the frequency of appearance of the four terms, the number of each category is counted and analyzed in relation to those of the other titles. The ratio of male and female characters is examined. The data of each series of textbooks is also compared with those of the others to identify which one handles the honorific titles appropriately in favor of gender fairness.

Second, the social status and occupations of the characters extracted in the previous stage are examined especially focusing on whether or not they are adults and also on what kind of jobs are assigned to those adult females as well as males.

Finally, the data of the current textbooks are compared with those of the precedent study (Nakai, 2005) and discussed in terms of gender fairness and male-female equality in education.

III. Results

III.1 Quantity: Frequency of appearance

As shown in Table 1 of Appendix, the eighteen textbooks examined here include 763 human characters which are addressed with any of the four titles such as *Ms.*, *Mrs.*, *Miss*, and *Mr.* Out of them, 471 (61.7%) are females and 292 (38.3%) are males: the female-male ratio is approximately 3 to 2.

Among the four titles, *Ms.* is the most frequently used, *Mr.* is the second, and *Mrs.* the third: 350 (45.9%), (292) 38.3%, (121) 15.9%, respectively. No textbooks include *Miss*.

Looking closely at each of the six series, all the eighteen textbooks employ *Ms.* and *Mr.*, but *Mrs.* does not appear in TT series at all. As stated above, *Miss* never appears in the current textbooks.

In addition, the three books of CL series have the largest number of characters, 202, out of which 125 are female and 77 are male, and also 75 of the females are *Ms.* and 50 are *Mrs.*: Male to female ratio is approximately five to three while *Ms.* to *Mrs.* ratio is three to two. In terms of female appearance, the series of OW1-3 includes the largest number of females, 131, as well as the largest number of *Ms.*, 95. The male-female ratio is about three to one, and *Ms.* and *Mrs.* ratio is three to one.

In contrast, the series NH1-3 includes 88 characters, the smallest number of the six titles, and 50 females (*Ms.* and *Mrs.*: 37 and 13) and 38 males. The ratio of the three terms is approximately 3:1:3. Thirty-seven is also the number of *Ms.* appearing in NC1-3 where *Mr.* counts 62, nearly twice the number of NH series. See Tables 3 to 8 of Appendix for the details of each book of each series.

III.2 Quality: Social status and occupation

Although *Ms.* is the most frequently used title of the four, it often refers to female teachers. All the junior high school textbooks employ school settings where a group of fictional junior high school boys and girls play the roles of central characters. They experience a variety of events in their daily lives mostly inside their communities including schools and families. Therefore, their teachers frequently appear in their junior high school scenes,

so do their family members such as fathers and mothers in their family scenes. Then, the female teachers are almost always called or referred to by their names with the title *Ms.* while mothers are usually called and referred to by the title *Mrs.* often paired with Mr. as in *Mr.* and *Mrs.*

In number, 22 of 43 female characters called by *Ms.* are teachers while 10 of 21 are mothers: 51.2% and 47.7%, respectively. Out of 42 teachers, 22 are female and 20 are male, 52.4% and 47.6%, respectively. Out of 18 parents, 10 are mothers and 8 are fathers: 55.6% and 44.4%, respectively. The numbers of female teachers, male teachers, mothers, fathers, Mss. of the other trades, Mmes on the other trades, and Messrs. on the other trades are 22, 20, 10, 8, 21, 11, 32: 17.8%, 16.1%, 8.0%, 6.5%, 16.9%, 8.9%, and 25.8%, respectively.

In addition, the social statuses or occupations for females other than teachers include a famous singer (SS3, p.38), a Finnish designer (NC3, p.16), an industrial designer (TT2, p.70), an ecologist (CL2, p.62), a school nurse (OW2, p.119). Most of them are public figures. On the other hand, *Mrs.* is almost always used for the mothers of some main characters mostly in some domestic scenes.

In contrast, the male characters are described on a wider range of occupations and social status including musician (NH2, p.61), sushi chef (SS3, p.55), table tennis coach (NC1, p.29), banker (NC3, p.106), photographer (NC3, p.109), dog trainer (CL2, p.54), diplomat (CL3, p.34), and librarian (OW2, p.85).

In terms of handling *Ms.*, TT series does not include *Mrs.* at all though the other five of the six series teach both *Ms.* and *Mrs.* as female honorific titles along with Mr. as the male counterpart. They explain that *Mrs.* is used only for married women. CL1-3 instructs the inclusive use of *Ms.* for every woman. Only NC1-3 states a political reason for the usage of *Ms.* that it is unfair to differentiate women by the two titles based on their marital status. SS1-3 includes the expression of *Mr. and Mrs.* as a fixed phrase though *Mr. and Ms.* never appears as a combination. No textbooks refer to the history of the word.

III.3 Discussion: Comparison with the precedent study

Compared with the results of the precedent study on *Ms.* (Nakai, 2005), one of the most distinctive differences in a numerical sense is a drastic increase of the use of the four honorific titles in the current versions. As Tables 1 and 2 show, the total number became seven times larger, from 108 to 763. This might be partly the effect of the structural change in the textbooks; The current version of textbooks employ the aforementioned community settings all through the books where the main characters, mostly junior high school students, lead their daily lives interacting with the people around them including teachers, classmates, and family members, and experiencing a variety of events. Consequently, the main topics tend to be their school activities and family lives, and so teachers and parents come into the scenes more frequently than before.

Another difference is that all the current textbooks employ *Ms.* though one of the seven series examined a decade ago ignored it. Moreover, *Ms.* took the place of *Mr.* and ranked as the top of the four honorific terms. In addition, *Miss.*, which was used barely (13.9%) in two of the seven series in the previous study, completely disappeared from the current version. See Tables 1 and 2 for the details.

Still another difference is that *Mrs.*, which remains as a major address term, does not appear in combination with *Mr.* so frequently as before even though the combination of *Mr.* and *Ms.* never appears.

With regard to the social status and occupations attributed to the main characters, as shown in Table 9, females called by *Ms.* tend to be teachers in both two versions of textbooks. However, all the female teachers are called by *Ms.* in the current versions while in the precedent study 19 of 26 (73.1%) teachers are called by *Ms.* and 26 of 30 (86.7%) females with *Ms.* are teachers (Nakai, 2005), which means that *Mrs.* was also used for teachers and that *Ms.* for mother and wife, too. In addition, the numbers of male and female teachers are 20 and 22 in the newer books and 24 and 26 in the older ones. The male-female ratio resembles each other: 47.6% and 52.4%, 48% and 52%, respectively.

On the contrary, some of the problems reported in the precedent study still remain in the current version of textbooks. One is the paucity of the

description of the historical significance, the present status, and the politically correct usage of *Ms.*: Only one series provides them but the others handle the word very superficially by simply introducing it as a female address term.

Then, the role of teachers becomes crucial. As a number of scholars and practitioners claim, how teachers handle instructional materials really affects students' learning, and whether or not societal gender biases are brought into school depends on teachers' way of coping them (Gollnick, Sadker, & Sadker, 1982; Fujita, 1993; Grossman & Grossman, 1994; Kimura, 1999; Yoshihara, 2013). So, teachers are to take responsibility to recognize the sexist reality in the current textbooks and carefully handle them, let alone the careful production of more gender fair and sensitive textbooks in order to achieve gender equality in the field of English education in Japan,

IV. Conclusion

The investigation of Japanese junior high school textbooks of English focusing on the treatment of the female honorific title *Ms.* has revealed a mixed reality of English education in the country today. Compared with the precedent study, the results show some degrees of improvement in terms of female visibility: More female characters more frequently appear in the textbooks than the male counterparts. In addition, more adult women are referred to with their last names and the title *Ms.* On the other hand, the occupations and social status attributed to the female characters are still limited and narrower in the range than their male counterparts, which was, and still is, one of the major problems continuously pointed out.

There are a number of limitations to this study. One is that the present paper deals only with textbooks but, as Sunderland (1992) claims, the other research areas are also important to understand the reality of the gender issues in English education. Another limitation is methodological: This study only partially, not fully, duplicated the precedent study which examined the textbook users' perception of *Ms.* as well as the textbooks' treatment of the term.

In addition, GSY is renewed almost every decade during which the

registered textbooks are also revised every four years. In April 2016, when this paper goes public, the newly revised versions of textbooks will be published. The books examined here will not be used any more and these results will be already outdated. On the other hand, the reality is that gender equality has not been fully achieved in every aspect of Japanese society. As reported in the latest annual ranking of Gender Gap Index (World Economic Forum, 2015), the country is placed at the 104th, the lowest in the so-called advanced countries and districts. So it is indispensably necessary to continue to investigate how the coming new textbooks deal with gender. Hopefully, they will turn out better in terms of gender equality in order to achieve more egalitarian society to everyone.

References

- Baron, D. (1986). *Grammar and gender*. New Haven: Yale University Press.
- Cameron, D. (1985). *Feminism and linguistic theory*. London: Macmillan.
- Ehrlich, S. & King, R. (1992). Gender-based language reform and social construction of meaning. *Discourse & society*, 3(2), 151-166.
- Fujita, H. (1993). Kyouiku niokeru seisa to jendah. In A. Arima (Ed.), *Gender and Culture* (pp. 257-294). Tokyo: University of Tokyo Press.
- Gollnick, D., Sadker, M., & Sadker, D. (1982). Beyond the Dick and Jane syndrome: Confronting sex bias in instructional materials. In M. Sadker & D. Sadker (Eds.), *Sex equity handbook for schools* (pp. 60-95). New York: Longman.
- Grossman, H. & Grossman, S. H. (1994). *Gender issues in education*. Needham Heights, MA: Allyn and Bacon.
- Hartman, P. L., & Judd, E. L. (1978). Sexism and TESOL materials. *TESOL quarterly*, 12(4), 383-393.
- Ito, Y., Owaki, M., Kamiko, T., and Yoshioka, M. (1991). *Kyokashononakano danjosabetsu*. Tokyo: Akashishoten.
- Kimura, R. (1999). *Gakkoubunka to jendah*. Tokyo: Keisou-shobou.
- Kimura, R. (2008). Jendah no shiten de miru gendai no kyouikukaikaku. In R. Kimura & S. Furukubo (Eds.) *Jendah de kangaeru kyouiku no genzai: Feminizumu kyouikugaku wo mezashite*. Osaka:

- Kaihou-shuppansha.
- Kishizawa, H. (2000). Danjobyoudou kyouiku no soshutsu ni mukete: Yokohamashi no jissen kara. In A. Kameda & K. Tachi (Eds.) *Gakko wo jendah furii ni* (pp. 169-195). Tokyo: Akashi-shoten.
- Lakoff, R. (1975). *Language and woman's place*. New York: Harper & Row.
- Lesikin, J. (1995). *ESOL textbooks and the social power of the ESOL students: Procedures for analyzing the potential influences of textbook characteristics*. Unpublished doctoral dissertation. Teachers College, Columbia University.
- Martyna, W. (1983). Beyond the he/man approach: The case for nonsexist language. In B. Thorne, C. Kramarae, & N. Henley (Eds.), *Language, gender and society* (pp. 25-37). Rowley, MA: Newbury House.
- MEXT. (2006). Danjo kyoudousakakushakai no keisei nimuketa gakushukatsudo no shinkou. *Monbukagaku hakusho, Pt.2, Ch.1, Sec.11*. Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200601/002/001/029.htm
- MEXT. (2015). Koutougakkou Gakushuu-shidouyouryou eiyakuban (kariyaku). Retrieved from <http://www.mext.go.jp>youryou>eiyaku>
- Muggio, R. (1987). *The nonsexist word finder: The dictionary of gender-free usage*. Phoenix, AZ: The Oryx Press.
- Naikakufu. (2012). *Danjo kyoudosankaku hakusho* (Statement of men & women equal employment).
- Nakai, M. (1999, August). *Sex and gender presentation of senior high school English textbooks in Japan*. Paper presented at the 12th World Congress of International Association of Applied Linguistics (AILA), Tokyo, Japan.
- Nakai, M. (2000). Have Japanese English textbooks improved?: Male and female representation of current textbooks. *The bulletin of the Graduate School of Education of Waseda University, 10*, 69-80.
- Nakai, M. (2001). Sex and gender in the pre- and main reading sections of high school English textbooks in Japan. *The Tsuru University Review, 54*, 83-96.

- Nakai, M. (2002). Gender representation in visual components of high school English textbooks in Japan. *The bulletin of the Graduate School of Education of Waseda University, Separate Volume*, 9(2), 211-234.
- Nakai, M. (2005). Students' perception of the female title Ms. *The Journal of Tokyo International University: The School of Language Communication*, 7, 31-41.
- Nakai, M. (in process). Have Japanese English textbooks really improved?: Reexamination of gender representation in current textbooks. *The Journal of Tokyo International University: Humanities and sociology*, 1.
- Nakamura, M. (1995). *Kotoba to feminizumu*. Tokyo: Keiso-shobo.
- Narisawa, Y. (1992). Comprehensive studies in English education (5): The portrayal of women in English textbooks in Japan: A sociolinguist's view. *Tohokugakuindaigaku-ronshu: Ningen, gengo, joho*, 102, 103-122.
- Pihlaja, S. (2008). Would you like to dance with me, Miwa?: Gender roles and the EFL text. Retrieved from <http://www.oro.open.ac.uk>
- Porreca, K. L. (1984). Sexism in current ESL textbooks. *TESOL quarterly*, 18(4), 705-724.
- Sasaki, E. (1994). Sexism in English textbooks: How could Japanese possibly survive in "internationalized" world. In Women's Studies Association (Ed.), *Joseigaku*, 2, 121-139. Tokyo: Shinsuisha.
- Spender, D. (1980). *Man made language*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Sunderland, J. (1992). Gender in the EFL classroom. *ELT journal*, 46(1), 81-91.
- Togano, F. (2009, February). So where are the working women?: A discussion of gender roles in high school textbooks. *The language teacher*, 33(2), 13-17.
- Ueno, C. (2006). Fuan na otokotachi no kimyouna rentai: Jendah-furii bashingu no haikei wo megutte. In C. Ueno et al. (eds.), *Backlash: naze jendah-frii wa tatakaretanoka?* (pp. 378-4399. Tokyo: Soufusha.
- World Economic Forum. (2015). *The global gender gap report 2015*. Retrieved from <http://www3.weforum.org>GGGR2015>cover>

Yoshihara, R. (2013, September/October). Learning and teaching gender and sexuality issues in the EFL classroom: Where students and teachers stand. *The language teacher online*, 37(5), 8-11. Retrieved from http://www.jalt-publications.org/files/pdf-article/37.5tlt_art02.pdf

Appendix

Tables 1: Number of four titles (2015)

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
NH1~3	37	0	13	50	38	88
SS1~3	64	0	7	71	56	127
NC1~3	37	0	15	52	62	114
TT1~3	42	0	0	42	18	60
CL1~3	75	0	50	125	77	202
OW1~3	95	0	36	131	41	172
total	350	0	121	471	292	763
%	45.9	0	15.9	61.7	38.3	

Tables 2: Number of four titles (Nakai, 2005)

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
NH1~3	5	0	2	7	4	11
SS1~3	4	0	1	5	12	17
NC1~3	3	1	1	5	6	11
TT1~3	5	0	5	10	3	13
CL1~3	7	2	3	12	10	22
OW1~3	6	0	0	6	10	16
TA1~3	0	5	3	8	10	18
total	30	8	15	53	55	108
%	27.8	7.4	13.9	49.1	50.9	

Key:

NH=New Horizon English Course (Tokyo Shoseki)

SS=Sunshine English Course (Kairyudo)

NC=New Crown English Series (Sanseido)

TT=Total English, New Edition (Gakko Tosho)

CL=Columbus 21 English Course (Mitsumura Tosho)

OW=One World English Course (Kyoiku Shuppan)

TA=Total Active Comm.: English for active learners (Shubunkan)

Table 3: Total of NH series

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
NH1	21	0	0	21	10	31
NH2	9	0	12	21	7	28
NH3	7	0	1	8	21	29
total	37	0	13	50	38	88

Table 4: Total of SS series

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
SS1	17	0	0	17	27	44
SS2	42	0	4	46	7	53
SS3	5	0	3	8	22	30
total	64	0	7	71	56	127

Table 5: Total of NC series

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
NC1	20	0	6	26	20	46
NC2	10	0	4	14	8	22
NC3	7	0	5	12	34	46
total	37	0	15	52	62	114

Table 6: Total of Total series

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
TT1	23	0	0	23	11	34
TT2	14	0	0	14	1	15
TT3	5	0	0	5	6	11
total	42	0	0	42	18	60

Table 7: Total of CL series

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
CL1	40	0	29	70	36	106
CL2	6	0	10	16	18	34
CL3	29	0	11	40	23	63
total	75	0	50	126	77	203

Table 8: Total of OW series

	Ms.	Miss	Mrs.	Female sum	Mr.	Total
OW1	38	0	7	45	16	61
OW2	33	0	24	57	8	65
OW3	24	0	5	29	17	46
total	95	0	36	131	41	172

Table 9: Social status of the female characters (2015)

title	status	NH	SS	NC	TT	CL	OW	total
Ms.	teacher	3	4	2	3	6	4	22
	others	0	4	4	1	6	6	21
Mrs.	mother	3	1	2	0	0	4	10
	others	0	1	1	0	8	1	11
Mr.	teacher	3	2	5	4	3	3	20
	father	0	2	3	0	2	1	8
	others	4	5	3	0	12	8	32
		13	19	20	8	37	27	124

Key:

NH=New Horizon English Course (Tokyo Shoseki)

SS=Sunshine English Course (Kairyudo)

NC=New Crown English Series (Sanseido)

TT=Total English, New Edition (Gakko Toshō)

CL=Columbus 21 English Course (Mitsumura Toshō)

OW=One World English Course (Kyoiku Shuppan)

目的節の統語範疇と機能について

生井 健一

早稲田大学

1 はじめに

Asano 2007 は、(1)のような文を「目的表現 (Purpose Expression)」と呼び、その構成要素を「有生名詞句 (animate NP)」、「不定句 (infinitival phrase)」、そして「移動動詞 (motion verb or MV)」であると分析する。 (「目的表現」は「～のため」のような副詞表現を想起させるので、以下「目的不定表現を含む文」の略称として「目的文」という名称を使用する。)

- (1) ジョンが [inf 本を買いに] 行った
 有生名詞句 不定句 移動動詞

Miyagawa 1987 によれば、不定句は本来節なので、(1)はもともと複文なのだが、不定句内の動詞が主節の移動動詞と再構築を起こして複合動詞を構成することがあり、その際は、(2)に示すような SOV 構造 (すなわち単文) に変化するという。

- (2) ジョンが 本を [買いに行った]
 S O V

その証拠としてよく挙げられるのが、「しか」を伴う目的語と主格表示された目的語の分布である。

- (3) (= Asano の(2); cf. Oyakawa 1975, Muraki 1978)

- a. [馬がビールを飲むこと]しか面白くない
b. *[馬がビールしか飲むこと]が面白くない

- (4) (= Asano の(3); cf. Kuroda 1965, Kuno 1973)

- a. ジョンは [トムが、本を/が 買えると] 言った
b. ジョンは [トムが、本を/*が 買うと] 言えた

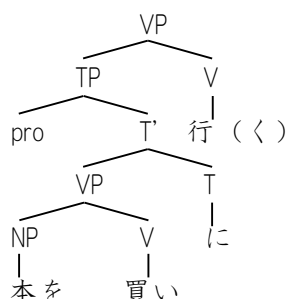
(3a-b)から「しか」は否定表現を持つ節にのみ、また、(4a-b)から主格目的語は可能の助動詞「え(る)」と同じ節内にのみ許されることがわかる。これは、「しか～な(い)」および「NP-が～え(る)」に課された「同一節条件 (Clausemate Condition)」と呼ばれるものである。このことを念頭に目的文の例を見てみよう。

(5) (= Asano の(4); cf. Miyagawa 1987)

- a. ジョンが（東京へ）本しか 買いに行かなかった
- b. ジョンが（東京へ）本を/が 買いに行ける

(5a)、(5b)ともに適格文なので、「本しか」と「本が」は、それぞれ「なか（った）」および「え（る）」と同じ節にあることになる。つまり、(2)に見られるように、「買いに」と「行（く）」が再構築を経て1つの複合動詞を構成し、結果、複文が単文化されているということだ。この現象を樹形図で示すと以下のようになろう。

(6) a. 再構築前：複文



b. 再構築後：単文



再構築に必要な条件は、不定句内の動詞と主節の移動動詞が隣接することである。この「隣接性条件」が満たされないと、再構築は不可能とされる。

(7) (= Asano の(5); cf. Miyagawa 1987)

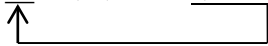
- a. *ジョンが本しか買いに〔東京へ〕行かなかった
- b. ジョンが本を/*が買いに〔東京へ〕行ける

(7a-b)においては、「東京へ」が「買いに」と「行（く）」の間に入り再構築を阻む。よって、これらはともに複文のままである。なので、「本しか」と「ない」、「本が」と「え（る）」はいずれも同一の節にはないことになり、非文が導かれてしまう。

この伝統的な分析に対して Asano 2007 は、不定句を節ではなく純粋な句と捉え、目的文は常に単文であると主張する。(7a-b)の不適格性については、再構築が阻まれることによるものではなく、(8)に図示される「しか」および「が」を伴った目的語を含む不定句の移動が、統語制約違反を誘発するからだとする。

(8) a. ジョンが 東京へ [本しか買いに] 行かなかった

b. ジョンが 東京へ [本が買いに] 行ける



また、不定句は、その副詞的な意味にもかかわらず、付加語 (adjunct) ではなく、移動動詞の補語 (complement) であるとし、このことが、有生名詞句しか目的文の主語になれないことの理由だと論じている。

本稿は、Asano によるこれらの分析が理論的にサポートされないものであること、よって当面、Miyagawa 1987 による再構築分析が支持されるべきであることを示すものである。

本稿の構成は以下のとおり。セクション 2.1 で、Asano による、不定句は補語であるという分析、セクション 2.2 において、「しか」および「が」を伴った目的語を含む不定句の移動が「適正束縛条件」を犯す構造を導いてしまうという分析を解説する。セクション 3 では、これら 2 つの分析に潜む問題点を指摘し、セクション 4 にて議論をまとめ、Asano の分析は Miyagawa による再構築分析の対案にはなり得ないと結ぶ。

2 Asano 2007

2.1 補語としての不定句

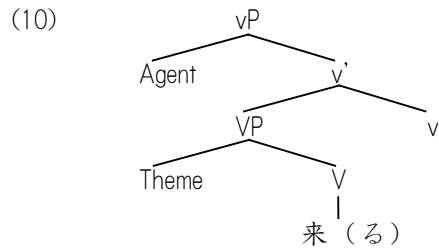
Asano はまず移動動詞「来 (る)」がその主語に与える意味役割に注目し、(9)を提示して以下の説明をする。

(9) (= Asano の(10))

- a. ゾウがわざと樹の下へ来た
- b. (突風に煽られて) 腰に風船をつけたハムスターがうちの玄関先まで来た

「わざと」という副詞から主語の「意図」が読み取れるので、(9a)の「ゾウ」の意味役割は Agent と言える。一方、(9b)の「ハムスター」は意図して飛んできたわけではないので、その意味役割は Theme とされる。また、「別個の意味役割は、別個の統語位置にて付与される」という仮説のもと、Asano は Agent と Theme の付与位置を(10)のように指定する¹。つまり、Agent は (伝統的な) 主語に、Theme は補語に与えられるということである。「来 (る)」が非対格動詞 (unaccusative verb) と分類できることを考えれば、(9b) において、表層の主語が補語 (つまり目的語) の位置に基底生成されること自体は何ら不思議でない。

¹ Experiencer や State のような意味役割は普通(10)における Agent の位置、Goal や Source は Theme の位置に付与されると考えられているので、Asano が採用する仮説 ("the hypothesis that different θ -roles are mapped to different syntactic positions" (p. 20)) は (文字通りの解釈をするならば)、正確でないように思える。この点についてはセクション 3.1 で考察する。

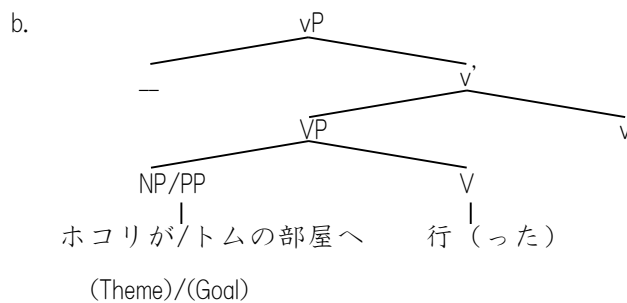
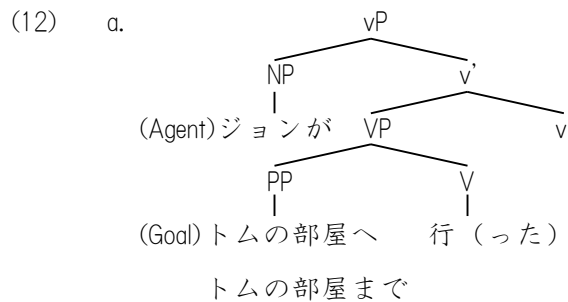


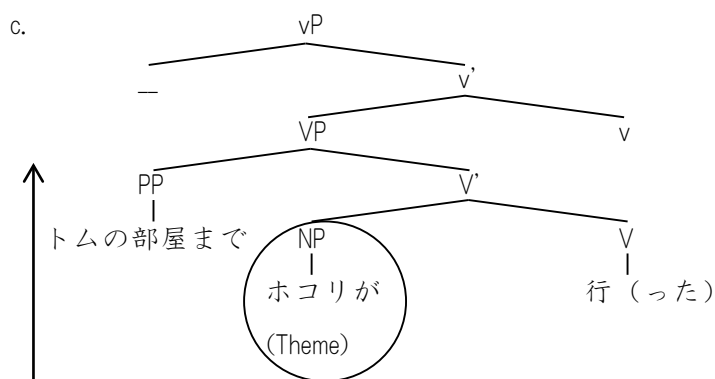
また Tsujimura 1994 に従い、Asano は「-へ」は補語であるが、「-まで」は付加語である、と規定する。よって、(9a)の「樹の下へ」は補語として「来(る)」から意味役割 Goal を受け取るが、(9b)の「うちの玄関先まで」はあくまでオプショナルな追加情報なので、「来(る)」から意味役割を受け取ることはない。

主語に与える意味役割は、移動動詞「行(く)」の場合も同じなので、(11a-b)間に見られる適格性の相違は(12a-c)の構造分析から説明できると Asano は言う。

(11) (= Asano の(13))

- a. ジョンが(わざと) トムの部屋へ/まで行った
- b. ホコリがトムの部屋*へ/まで行った





(11a)の場合、(12a)が示すように、主語「ジョンが」はvの指定部に基底生成されAgentを受け取るので、付加語である「トムの部屋まで」はもちろんのこと、Goalを受け取る補語「トムの部屋へ」とも共起可能である。一方、(11b)では無生物主語「ホコリが」が意図を持ち得ないので、Themeを受け取るべくVの補語の位置に基底生成される。しかし、この位置はPP補語「トムの部屋へ」がGoalを受け取る場所でもあるので、(12b)が図示するように、「ホコリが」と「トムの部屋へ」が同位置を取り合うことになり、結果、非文が導かれてしまうというのだ²。「トムの部屋まで」であれば、付加語であるゆえ意味役割を必要としないので、Vの補語の位置に基底生成されなくてもよい。よって、(12c)に示したように、「ホコリが」が単独でその位置に現れ、問題なくThemeを受け取って適格文が導かれる。(最終的な語順は、(12c)が描写するように、NP-移動によって達成される³。)

以上のことを念頭に以下の例文を考察していこう。

² この説明に対する反例は簡単に見つかる。例えば、以下の(i)であるが、無生物主語「時間は」が、補語「どこへ」と問題なく共起している。

- (i) あれほどあった時間はどこへ行ってしまったのだろう

逆に、この主語は、付加語とされる「どこまで」とのほうが相性が悪い。

- (ii) #あれほどあった時間はどこまで行ってしまったのだろう

よって、(ii)および(11b)の「ホコリがトムの部屋へ行行った」の不適格性は、「へ」が補語、「まで」が付加語という統語的分類によるものではなく、各文内における意味的なものであると考えられる。この点に関しては、セクション3.1で再び触れる。

³ Asano は最初から補語-付加語-動詞の語順を示して議論を進めており、表層で主語となる「ホコリが」の移動および移動後の位置に関する言及は一切していない。しかし、補語が主要部に隣接し、付加語はその外側に来るべきことは以下の例 (Radford 1988: 177) から明らかなので、(12c)における移動分析は妥当であろう。

- (i) a. the student [of Physics] [with long hair]
b. *the student [with long hair] [of Physics]

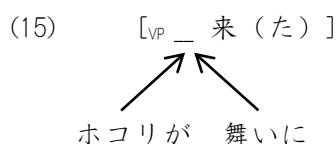
(13) (= Asano の (7))

- a. ホコリが（ここまで）来た
b. ホコリが舞う

(14) (= Asano の (8))

- a. *ホコリが（ここまで）舞いに来た
b. *ホコリが舞いに（ここまで）来た

(13a-b)から、「ホコリが」は「来た」および「舞う」のいずれとも共起できることがわかる。しかし、(14a-b)に明らかなように、不定句「舞いに」とは共起できない。Asanoによれば、これは「舞いに」も補語だからということである。すなわち、(12b)の状況と同様に、不定句「舞いに」が無生物主語「ホコリが」と「来(た)」の補語の位置を取り合うため、(14a-b)は非文になるというのだ⁴。(15)の図解を参照されたい。



となると、無生物主語を持つ目的文というのは、統語上存在し得ないことになる。事実、Asano は、(16)を目的文の構造として提案している。ここでの SUBJ は軽動詞 *v* の指定部にあるので、Agent を受け取ることのできる有生主語でしかあり得ない ((10)参照)。

⁴ 不定句が補語であることのサポートとして、Asano は Tsujimura 1993 から以下の非文を引用する。

(j) (= Asano の(16))

* 太郎が新宿へ [本を買いに] [寿司を食べに] [映画を観に] 行った

意味役割を受け取る補語の数は動詞により定まっているので、規定数以上の補語の使用は許されない。この制約は付加語には当てはまらないものなので、不定句を補語とすれば、(i)の非文法性が自ずと説明されるというわけだ。

しかし、同じタイプの付加語の繰り返しも許されないという事実鑑みると、(i)が直ちに「不定句＝補語」の証左になるとは言えない。(ii)における *slowly* および *carefully* はともに同タイプ (-ly 副詞) の付加語であるが、共起はできない。

(ii) *John ran slowly carefully.

このことも含め、Tsuji-mura 1993 に関する問題点については、高橋（本巻）および Namai to appear を参照されたい。

(16) (= Asano の(9))

[_{VP} SUBJ [_{VP} (PP)_θ] [_{V'} InfIP MV]]]

2.2 不定句の移動分析

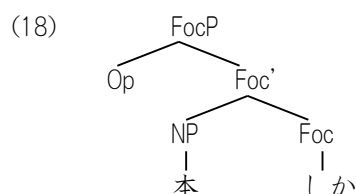
セクション1で Miyagawa 1987 による再構築分析を見た際、再構築が許される条件として2つの動詞の隣接性を確認した。(7)に示したように、この条件が満たされないかぎり再構築は行われず、不定句はそのまま埋め込み節として残るので、その節内に「しか」や主格目的語が現れると同一節条件が犯されてしまい、非文ができるということであった。

しかし、すでに指摘したように、Asano は不定句を節ではなく句であるとし、(7)の不適合性は不定句の移動により、「本しか」および「本が」を含んだ不定句の移動が統語制約違反を惹起するからだと説く。(8) (以下に(17)として再掲示) をもう一度参照されたい。

- (17) a. ジョンが 東京へ [本しか買いに] 行かなかった
 ↑
 └──────────┘
b. ジョンが 東京へ [本が買いに] 行ける
 ↑
 └──────────┘

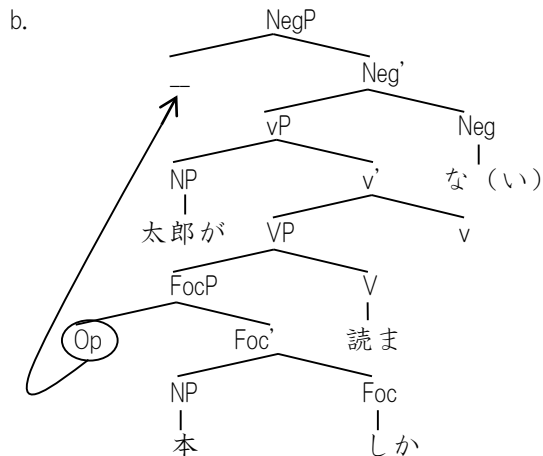
では、一体どのような統語制約違反が引き起こされるのだろうか。

一般に否定対極表現 (negative polarity item) として知られる「しか」であるが、Asano は Tanaka 1997 に従い、この表現を含む句は以下の構造を持つと規定する。



つまり、「しか」は Foc(us)形態素であり、「しか」そのものが主要部として名詞句補語を取るというのだ。また、その指定部には発音形を持たない否定演算子 (negative operator) Op が存在し、それが否定文に現れる NegP の指定部に移動することによって、否定対極表現がライセンスされるとする。なので、(19a)が適格文であることは、(19b)に示される移動によって「しか」がライセンスされているから、ということになる。

(19) a. 太郎が本しか読まない



この Op-移動分析の証拠として、Asano は以下のような島を含む非文を提示する。

(20) (= Asano の(22))

* 太郎が[LGB しか買った]人に会わなかった

(20)はカギ括弧で示した関係節を含むが、これが島となるので、関係節内の $[_{FocP} Op [_{Foc'} LGB しか]]$ から Op が主節の NegP の指定部に移動することは許されない。よって、Op がライセンスされず、(20)は非文になるというのである。

Asano はこの分析をもとに、(17a)の非文法性を次のように説明する。(21)の樹形図を参照されたい。否定対極表現を作る「しか」を主要部とする「本しか」の指定部から否定演算子 Op が NegP の指定部に移動したのち、Op の痕跡を含む不定句「↑ 本しか買いに」が NegP より上位の位置に移動する⁵。結果、当該痕跡は表層において同一指標を受ける Op に c-統御されないことになり、適正束縛条件 (Proper Binding Condition; e.g. Fiengo 1977) を犯してしまう。その後、主語「ジョンが」が TP の指定部に移動すれば求められる語順が達成されるが、(17a)は先の適正束縛条件違反により結局非文になる⁶。

⁵ (21b)に示すとおり、Asano はこの不定句移動の着地点を XP (の指定部?)としているが、この移動の理論上の理由および XP の詳細については今後の研究に委ねるとしている。

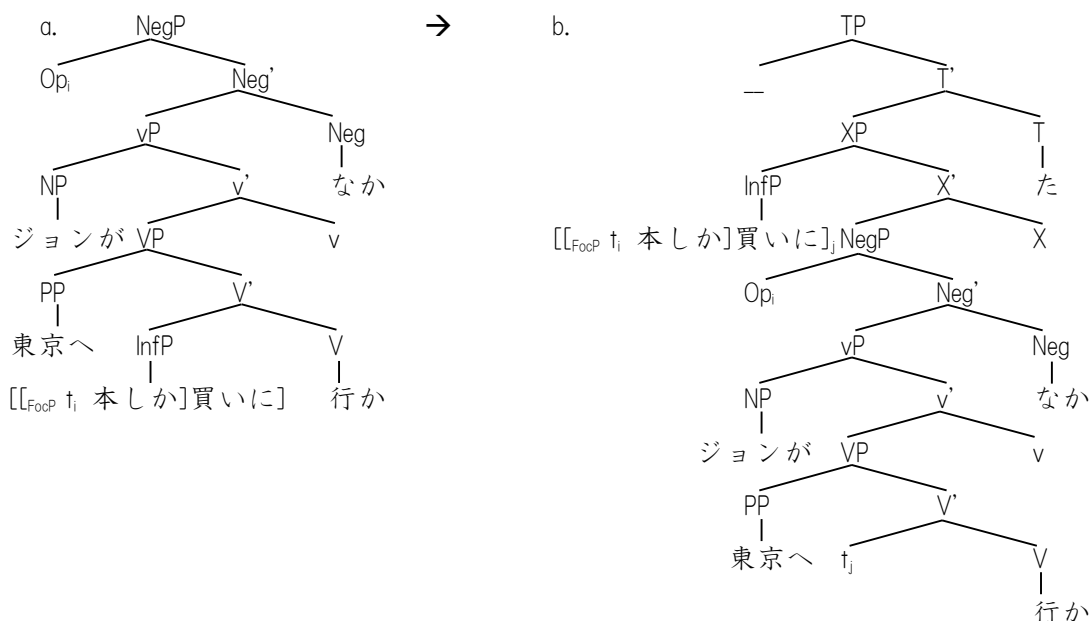
⁶ この主語の移動は筆者の想像にすぎない。脚注3で指摘したように、Asano がこのような移動を想定しているのかどうかは定かでないである。事実、Asano は(21a-b)を以下のように分析している。

(i) (= Asano の(20))

- a. ... $[_{VP} SUBJ [_{VP} PP [_{V'} InfIP MV]]]$... $^{OK} sika-nai$
 b. $SUBJ$... $InfP_j$... $[_{VP} PP [_{V'} t_j MV]]$... $* sika-nai$

(ib)からは、主語が vP に付加 (adjoin) されているのか、vP より上の投射に移動しているのかわからないが、Asano は(iia-b)の構造は(iiaa-b)だとするので、vP に付加していると考えられる。

(21) (= Asano の(24b)の分析に基づいたもの)



次に、(17b)において主格目的語を含む不定句が犯すとされる統語制約を見てみよう。

Asano は Tada 1992 および Wurmbbrand 1998 に従い、目的語の主格表示は、目的語が助動詞「え（る）」の指定部に移動し、そこでなされると考える。よって、(22a)では不定句内にある「本が」が、(22b)にあるように、「行ける」の一部を構成する形態素「え（る）」の指定部に移動して主格を受け取るとする。続いて「本が」の痕跡を含む不定句が、さらに上の位置((21b)における XP の指定部)に移動して(22c)の語順ができあがる。しかし、そうすると、(21b)の場合と同様、「本が」の痕跡が「本が」自身によって c-統御されなくなり、適正束縛条件が犯されて非文が導かれるというのだ⁷。

(ii) (= Asano の(17))

- a. ジョンが本しか買いに行かなかった
- b. *本しか買いに、ジョンが行かなかった

(iii) (= Asano の(18))

- a. [_{VP} SUBJ [_{VP} Infl MV]] OK *sika-nai*
- b. InfP_j [_{VP} SUBJ [_{VP} t_j MV]] * *sika-nai*

(iii)において主語 (SUBJ) が、vP の指定部に留まっていることを確認されたい。

しかし、主語が NegP および XP よりも上の位置にないと(17a)の語順の説明がつかないので、主語の移動も含んだ(21b)の分析を正しいものとして、議論を進める。

⁷ この分析はまったく的を射ていない。(22a-c)の分析は(17b)の派生が許されないことを示すはずなのに、(22c)の語順は(17b)のそれとは異なるものである。確かに(22c)の語順であれば、適正束縛条件違反というのもまだわかるが、(17b)から導かれる語順は、以下の(i) (= Asano の(5b))のとおりなので、そもそも「本が」の痕跡など存在せず、Asano が意図する適正束縛条件の違反はない。

- (i) *ジョンが [_{InfP} 本が買いに] 東京へ行ける

(22) (Asano の(27), (28)に基づく分析)

- a. ジョンが 東京へ [_{InfP} 本が買いに] 行ける
- b. ジョンが 東京へ 本が_i [_{InfP} t_i 買いに] 行ける
- c. ジョンが [_{InfP} t_i 買いに]_j 東京へ 本が t_j 行ける

ここで Miyagawa と Asano の分析をまとめておこう。

(23) Miyagawa の分析

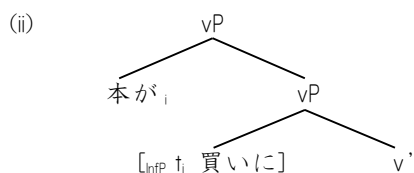
- a. [... NP-しか/が [_V V-に+MV-ない/える]] 再構築あり：単文
 - b. * [... [_{TP} ... NP-しか/が V-に] PP MV-ない/える] 再構築なし：複文
- 埋め込み節

(24) Asano の分析

- a. ... [_{InfP} ... NP-しか/が V-に] MV-ない/える 再構築なし：単文
- 不定句
- b. * ... [_{InfP} ... NP-しか/が V-に]_j PP t_j MV-ない/える 再構築なし：単文

Miyagawa にとって Asano の不定句 (InfP) は埋め込み節 (TP) であり、(23b)のように移動動詞

もし「本が」が不定句から飛び出し、「え(る)」の指定部、あるいはそれに相当する“vP-adjoined position” (Asano, p. 26)に移動するのなら、(ii)に示すように、「本が」とその痕跡を含む不定句[t 買いに]は、もはや構成素を作らなくなるので、「非構成素は移動できない」という観点からであれば、(i)の非文法性を説明できるかもしれない。



しかし、この説明のもととなるべき Asano の分析は(iii)である。

- (iii) (= Asano の(28a))
- [_{VP} NP-ga [_{VP} [_{VP} [_{InfP} t_j V-n] MV]-e] v]]

残念だが、(iii)からは移動動詞「行く」(MV)、可能助動詞「え(る)」(-e)、軽動詞(v)の関係がまったく読み取れない。「え(る)」(-e)は単独で自身の投射を持つように見えるが、主格目的語はその外側にある(音声素を持たない)軽動詞vの指定部にある。なので、どうして目的語が「え(る)」によって主格付与されるのか見当がつかない。

Asano による適正束縛条件違反分析のさらなる難点については、セクション 3.2 で指摘する。

(MV)に隣接しない場合、「V-に」とMVの再構築が阻止されるので、「しか」と「な(い)」、主格目的語と「え(る)」のいずれも同一節条件を満たせず、非文が導かれる。一方、(24a)のように埋め込み節と移動動詞が隣接する場合は再構築が起こり、文全体が単文となって同一節条件が満たされ、適格文が得られる。

これに対し Asano は、不定句を節ではなく純粹に句と規定し、再構築の不要性を説く。すなわち、(24a)において、不定句内に「しか」や主格目的語があっても、別の節にあるわけではないので（つまり、(24a)はもともと単文なので）、「しか」および主格目的語と「MV-ない/える」との間での同一節条件は、再構築を想定しなくても満たされるというのである。また、(2つの節の存在を前提とする)同一節条件違反をもってして Miyagawa が説明する(23b)の非文法性は、(24b)に示された移動分析で説明できるとする。すなわち、この移動は適正束縛条件違反を引き起こすのだから、(24b)を複文として捉え、同一節条件違反とするまでもない、ということである。

以上が、Asano 2007 の主張の要旨である。次セクションでは、この主張が抱える問題点を指摘していこうと思う。

3 問題点

3.1 補語としての不定句

セクション 2.1 で見たように、Asano は「舞いに」に代表される不定句を補語と捉える。補語であるからこそ、同じく補語の位置に基底生成される無生物主語とは共起できない。

「*ホコリが舞いに来た」が非文となるのはこのためだというのだ ((15)を参照)。

しかし、この説明には理論上大きな穴がある。以下の2文を比べられたい。

(25) *ホコリが 舞いに ここまで 来た

(26) *ホコリが わざと ここまで 来た

(25) (≈ (14b))と(26)の不適格性は、両文に共通する意味的なものであろう。「舞いに」も「わざと」も、意図を持つ主語を要求するが、ともに無生物の「ホコリが」を主語としているからだ。しかし、「わざと」は副詞的に機能する付加語にすぎない。付加語であるゆえ、存在しなくても文の統語的適格性に影響することはない。事実、(27)における「わざと」は統語上完全にオプショナルである。

(27) 太郎が(わざと)試合に負けた

そして同じことが(26)にも言える。「わざと」を取り除いても、(26)は適格文 (= (28)) だ。

(28) ホコリがここまで来た

しかし付加語なのだから、「わざと」が(26)において「ホコリが」と補語の位置を争うことはない。つまり、(26)の不適合性は統語上のものではなく、完全に意味上のものと言えるのである。(よって、(26)には、*ではなく、#を付すべきだろう。)

ここで、(25)から「舞いに」を取り除いても、(28)が得られることに注意してほしい。もし、「舞いに」が本当に補語であるなら、(28)は非文になってしかるべきである。ちょうど(29)において Goal の役割を担う「東京へ」が除かれたときのように。

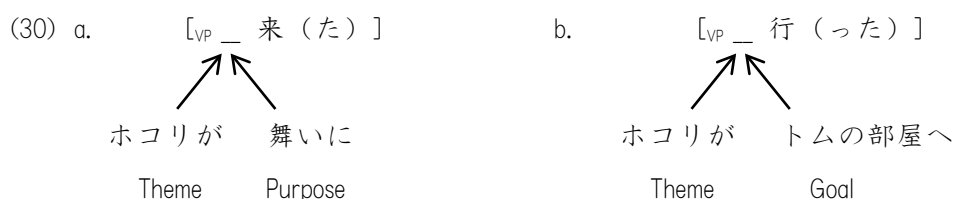
(29) 太郎が *(東京へ) 行った

すなわち、「舞いに」も付加語なのである。結局、(25)の不適合性をもって「舞いに」を補語とするのは、同じ不適合性を持つ(26)をして「わざと」が補語であると導くのと同一ことなのだ。そうでない、と主張するには、(25)の不適合性が意味によるものではなく、純粹に統語上の問題であることを証明しなければならない。これは、Asano 2007 において完全に欠落している点である。

また、(25)において、「ホコリが」と「舞いに」が「来(た)」の補語の位置を奪い合うという Asano の分析は、意味役割付与に関する Asano 自身の前提と矛盾するものでもある。Asano は「別個の意味役割は、別個の統語位置に与えられる」として、Agent 付与の場所を軽動詞 *v* の指定部、Theme 付与の場所を *V* の補語の位置とした ((10)参照)。ならば、仮に「舞いに」が補語だとしても、それが受け取る意味役割は明らかに Theme ではなく Purpose (か何か) なので、Theme 付与の位置とは別の場所に基底生成されてしかるべきだろう。

同じ矛盾が(11b)の「*ホコリがトムの部屋へ行った」においても指摘できる。(12b)に図示したように、「ホコリが (Theme)」と「トムの部屋へ (Goal)」は、それぞれ異なる意味役割を受け取るというにもかかわらず、「行 (った)」の補語の位置を奪い合うとされているからである。

加えて、(25)および(11b)の分析を突き合わせて見てみると、さらにおかしな点が見えてくる。Asano によるこれら2文の不適合性の説明は、(30a-b)のようにまとめられる。



(30a)の「舞いに」も、(30b)の「トムの部屋へ」も、ともに補語なので「ホコリが」と同じ位

(31) ジョンが [_{PP} 東京へ] [_{InfP} 本を買いに] 行った
 Goal Purpose

(32) a. (ジョンが) 本を買いに 東京へ 行った
付加語 補語
b. (ジョンが) 東京へ 本を買いに t_i 行った

Asano は、否定演算子 Op が NegP の指定部に移動することによって、「しか」がライセンスされるとし、この移動分析をもってすれば、「しか」と「な(い)」に課される同一節条件を持ち出すまでもない、とした。そしてこの移動が実際に観察される例として、島を含む文である(20) (以下に(33)として再記)を提示した。

48

当てはまらない環境において)、Op-移動による島の制約違反が観察されることを示さなければならない。

なので、単文の主語から Op が移動する例を観察してみよう。補語 (ie. 目的語) は島を作らないため、(34a)の *who* の移動は許されるが、主語は島を作るので、(34b)における *what* の移動は許されない、とされているからだ (Huang 1982)。

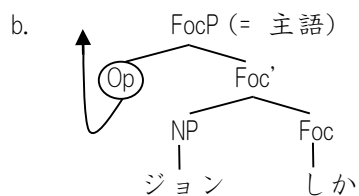
(34) a. Who_i was he taking [pictures of t_i]?
 補語

b. *What_i has [part of t_i] broken?
 主語

(Radford 2009: 206-207)

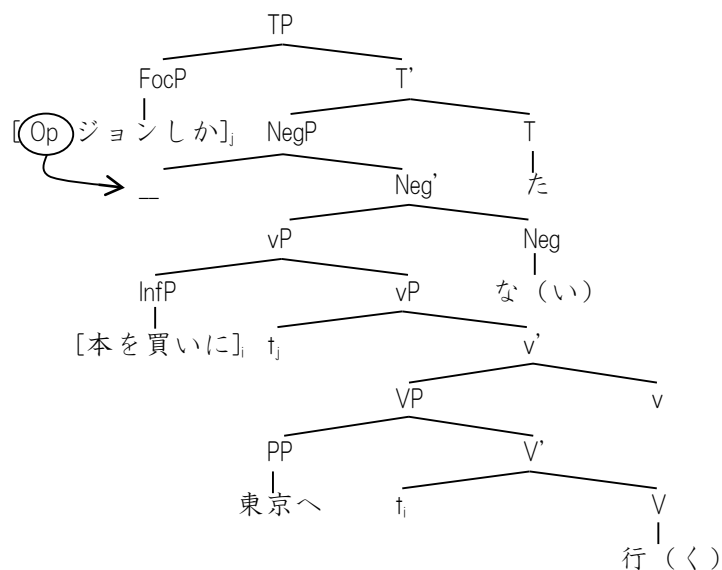
しかし、(35b)に示したように、主語から否定演算子 Op が抜け出すことになる(35a)は、適格文である。よって、Op-移動の関与は疑わしいことになる。

(35) a. ジョンしか本を買いに東京へ行かなかった



また、何らかの理由で(35a)の主語である FocP が島を作らないとしても、Op-移動分析はさらなる問題に直面する。なぜなら、適正束縛条件を違反する構造を導いてしまうからである。

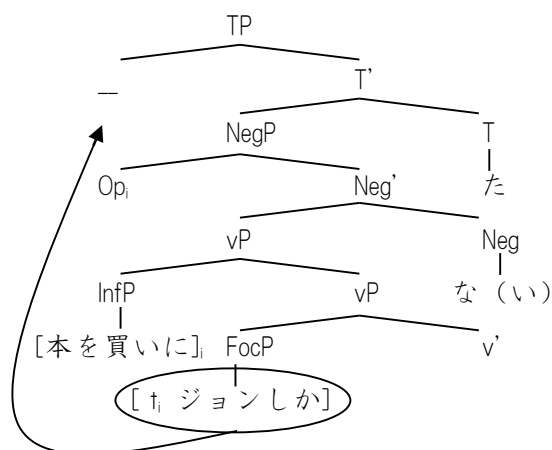
(36)



(36)に図示したように、Op が「な (い)」によるライセンスを求め、NegP の指定部に下方移動するならば、FocP が占める主語の位置に Op の痕跡が残ることになる。しかし、この痕跡は NegP の指定部に移動した Op によって c-統御されないので、適正束縛条件を犯してしまうのだ。

顕現する統語部門においては、通例下方移動は許されないので、当該の Op-移動は、主語である FocP がまだ vP の指定部の位置にあるときに行われるはず、と考える向きもあるかもしれない。しかし、そうすると、Op の痕跡を含んだ FocP が TP の指定部に移動した際、結局適正束縛条件を犯すことになる。

(37)



(37)に示した FocP の移動後、Op はもはや自らの痕跡を c-統御できないことを確認されたい。

このように、否定演算子 Op による移動という分析は、理論的にサポートできるものではないのである。

4 結論

Asano 2007 は、目的文に見られる「本を買いに」のような表現を不定句と呼び、付加語ではなく補語と捉えた。また、そうすることによって、目的文が有生主語を要求することには統語的な必然性が見出せると論じた。さらに、不定句内の動詞と主節動詞が隣接せず、結果、再構築が阻まれることによって観察される「しか～ない」および「主格目的語～える」による同一節条件の違反例は、いずれも適正束縛条件違反として説明がつくので、目的文は、その語順にかかわらず、単文であると主張した。

本稿は、不定句を補語とすることに潜む理論的問題点を詳らかにし、不定句は「わざと」と同じく付加語としたほうがよいことの根拠を示した。また、Asano による適正束縛条件違反を用いた説明の前提である否定演算子 Op の移動に統語的証拠がないこと、さらに、たとえば Op-移動があったとしても、主語からの Op-移動が、適正束縛条件を違反するにもかかわらず、適格文を導いてしまうという理論的齟齬を明らかにした。よって、Asano 2007 における主張はいずれも成立し得ないことになる。

「本を買いに」のような表現は、動詞上に時制を表せない（「*本をかうに/買ったに」）ので、確かに不定表現である。それでも「買い」は二項動詞なので、pro-drop 言語である日本語においては、発音されない主語を持つことを考慮に入れ、不定節（nonfinite clause）「pro 本を買いに」を構成する、と分析するのが通例である。Asano は何の根拠も示さずに句と規定するが、たとえば発音されなくとも pro という主語があるかぎり、Asano の言う不定句は節に他ならない。実際、当該の pro は音声形態を持つ主語に置き換え可能である。例えば、以下の(38a-b)では、「自分が」が pro に取って代わって出現している。

- (38) a. (人に頼むのではなく) ジョンは、自分が本を買いに (東京へ) 行きたかった
b. (人に頼むのではなく) 自分が本を買いに、ジョンは (東京へ) 行きたかった

「本を買いに」のような表現を素直に不定節と捉えた Miyagawa 1987 の再構築分析は、それだけでも正確性に勝る。そもそも不定句という規定自体が根拠のない曲解であり、よって、それをもとにした分析は、Miyagawa 分析の対案にはなり得ない。

参考文献

- Asano, Yukiko. 2007. Restructuring in Japanese revisited: A phrasal movement analysis of purpose expressions. *U. Penn Working Papers in Linguistics* 13(1): 15-28.
- Fiengo, Robert. 1977. On trace theory. *Linguistic Inquiry* 8: 35-62.
- Huang, C.-T. James. 1982. Logical relations in Chinese and the theory of grammar. Doctoral dissertation, MIT.
- Kuno, Susumu. 1973. *The structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

- Kuroda, Shegeyuki. 1965. Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. Restructuring in Japanese. In *Issue in Japanese Linguistics*, ed. by T Imai and M. Saito, 273-300. Dordrecht: Foris Publishers.
- Muraki, Masatake. 1978. The *sika nai* construction and predicate restructuring. In *Problems in Japanese syntax and semantics*, ed. by H. Irwin and J. Hinds, 155-177. Tokyo: Kaitakusha.
- Namai, Kenichi. to appear. Restructuring involving purpose/gerundive clause in Japanese. *Transcommunication* Vol. 3.
- Oyakawa, Takatsugu. 1975. On the Japanese *sika nai* construction. *Gengo Kenkyu* 67: 1-20.
- Radford, Andrew. 1988. *Transformational grammar: A first course*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, Andrew. 2009. *An introduction to English sentence structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tada, Hiroaki. 1992. Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14: 91-108.
- 高橋麻帆. 2016. Tsujimura 1993 の Purpose Clause と Gerundive Clause の分析の問題点－動詞の再構築およびイベント項. *JATLaC Journal* Vol. 10.
- Tanaka, Hidekazu. 1997. Invisible movement of *sika-nai* and the linear crossing constraint. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 143-178.
- Tsujimura, Natsuko. 1993. Adjunct and event argument in restructuring. In *Japanese and Korean linguistics* 3, ed. by S. Choi, 121-136. Stanford: CSLI.
- Tsujimura, Natsuko. 1994. Resultative and motion verbs in Japanese. *Studies in the Linguistic Sciences* 24: 429-440.
- Wurmbrand, Susanne. 1998. Infinitives. Doctoral dissertation, MIT.

第 15 回大会記録

《個人発表報告》

韓国語の属格助詞「ui」の随意性(発表報告)

早稲田大学大学院生 金台永

0. はじめに

所有を表す韓国語の属格助詞「ui」は、日本語の属格助詞「ノ」と意味、機能において類似点を有している。しかし、日本語の属格助詞は省略ができないのに対し¹、韓国語の属格助詞は口語、文語を問わず頻繁に省略される(伊藤、2013)。例えば、日本語の場合、所有を表す「彼の本」、「友達の本」、「先生の本」という名詞句は、「*彼本」、「*友達本」、「*先生本」と発話されることはまずないだろう。しかし、韓国語においては、属格助詞「ui」を介在しない「彼本(gue saram chaek)²」、「友達本(chingu chaek)」、「先生本(seonsaengnim chaek)」等のごく自然な表現である。この韓国語の属格助詞「ui」の省略の原因を、角田(1991、2009)の名詞句階層に基づき探ることが本稿の目的である。名詞句階層を用いることにより、韓国語と日本語における属格助詞の省略可否について明らかにできると考えられる。

1. 日韓両言語の属格助詞

1.1 韓国語における属格助詞

韓国語における属格助詞の研究は、三つの観点から議論されてきているようである。これらはそれぞれ、文法範囲、文法機能、意味機能及び語用論的観点からのアプローチに分けることができる(Kim, 1987)。また、属格助詞の用法においては、主体、所有、客体、同格、関係、所存等をあげることができ、それぞれの言語における用法は非常に類似していると言える。油谷(2005)によると、韓国語における属格助詞の出現頻度は日本語のそれと比べ半分以下であると明記されている。また、日本語においては「ノ」が伴われるが、韓国語においては「ui」が伴われない場合は、位置名詞の前、種類を示す場合、時の名詞が連続する場合、機会の「ノ」等³がある。次の1)～5)はその例を油谷(2005)から引用したものである。

1) 位置名詞の前

a. 나무 뒤에 누가 숨어 있는 것 같다.

namu dwie nuga sumeo issneun geos gatda

*木後ろに誰かが隠れているようだ。

¹ 発表時に、秋の風、秋風、大学内といった言葉に関する指摘を受けたが、秋風の場合、秋に吹く単なる風ではなく、話者にとってある特定の風もしくは秋風という言葉による特殊な意味合いを含意している。また、大学内の場合は、「-内」という語は接尾辞のようなものである。

² 彼の本の場合、gue(その)と chaek(本)間に saram(人)が介在しているが、これは gue には「彼、彼女、その、そのの」といった重意性があるからである。また、gue ui chaek のような表現も可能であるが、これは重意性を避けるための方法でありながら、非常に文語的な表現になる。

³ また、金(2003)によると、日本語において「ノ」で表現されるもののうち、韓国語においては動詞表現を用いて表現されるものがある。詳しい議論については金恩愛(2003)を参照されたい。

- b. 저 우체국 옆에 있는 다방에서 기다리겠습니다.
 jeo ucheguk yeope issneun dabangeseo gidarigessseubnida
 *あの郵便局横にある喫茶店で待っています。

2) 種類を示す場合

- a. 저는 음악 선생님이 되고 싶어요.
 jeoneun eumak seonsaengnimi doego sipeoyo
 *私は音楽先生になりたいわ。
- b. 장미 꽃이 피었다.
 jangmi kkochi pieossda
 *バラ花が咲いた。

3) 時の名詞が連続する場合

- a. 다음 주 목요일에 돌아올 것입니다.
 daeum ju mokyoile dolaol geosibnida
 *来週木曜日に帰ってくるでしょう。
- b. 내년 3월에 졸업합니다.
 naenyeon samwole joleobhabnida
 ??来年3月に卒業します。

4) 機会の「ノ」

- 이번 여행은 즐거웠다.
 ibeon yeohaengeun jeulgeowossda
 *今度旅行は楽しかった

5) その他

- 가격 외에도 여러 가지 문제가 있다.
 gagyek oeedo yeoreo gaji munjega issda
 *価格他にもさまざまな問題がある。

油谷(2005)一部修正

1.2 日本語における属格助詞

日本語における属格助詞「ノ」の用法は、相違点も多くの研究によって指摘されているが(金、2003; 金、2004; 韓、2010、2011等)、大部分韓国語のそれと類似していると言えよう。日本語の「ノ」の用法を「名詞+名詞」という用法から考えると、所有・所属、性質・状態、動作の主体、動作の対象のように分けることができる(『日本文法大辞典』、1971)。これらの用法は、いずれも韓国語においては省略が可能になることが多い。

2. シルバースティーンの名詞句階層と韓国語の属格助詞「ui」との関連性

2.1 角田(1991、2009)による名詞句階層

韓国語の属格助詞「ui」が日本語の「ノ」に比べ、頻繁に省略されることは自明な事実である。しかし、その要因については議論の乏しいところであると考えられる。いくつかの研究において、「ui」の随意性は議論されているが、随意性を論じる際、所有・所属等の用法のみならず、動作の主体・対象のような用法も混雑し議論が展開されている点が問題である。また、意味・語用論レベルでの議論も混在することもある。本稿では、「ui」の随意性について角田(1991、2009)にみるシルバースティーンの名詞句階層(1975)から探ることとする。

図 1 シルバースティーンの名詞句階層(角田(1991、2009)による)

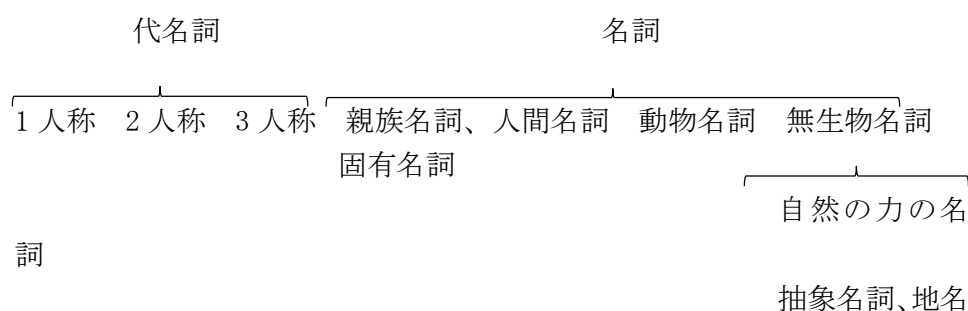


図 1 は、Silverstein(1976)の名詞句階層に角田(1991、2009)が修正を加えたものである。この階層によって、体格型、能格型言語を区別づける根拠が得られる。また、日本語の場合は、能動文・受動文における主語のなりやすさも説明できるという(角田、1991、2009)。つまり、これらの解釈からすると、左側の方が右側よりも卓越しているともいえる。では、この現象が韓国語の属格助詞とどのような関係を示すだろうか。

2.2 韓国語における属格助詞「ui」の省略現象

韓国語では、人称代名詞(図 1 では一番左側に位置するカテゴリーの名詞)が属格助詞に結合したときに、助詞「ui」は表面的には現れない。つまり、所有の意味を表すために、形は変わるものの、主格代名詞+主格助詞の結合の時と同様の形で現れるのである。これを表で表すと次のようになる。

表 1 韓国語における人称代名詞の主格形

人称代名詞		主格助詞	人称代名詞+主格助詞
1 人称	na	ga	nae ga
2 人称	neo		ne ga
3 人称	gue		gyae ga
1 人称複数	uli		uli ga

表 2 韓国語における人称代名詞の属格形

人称代名詞		属格助詞	人称代名詞+属格助詞
1 人称	na	ui	na ui または nae
2 人称	neo		neo ui または ne
3 人称	gue		gue ui (gyae ui) または gyae
1 人称複数	uli		uli ui または uli

表 1 と 2 で分かるように、韓国語の人称代名詞は、それぞれ 1 人称が/na/, 2 人称が/neo/, 3 人称が/geu/である。これらが主格助詞/ga/に結合すると、それぞれ/nae-ga/, /ne-ga/, /gyae-ga/のように変化するが、属格助詞に結合すると、/nae/, /ne/, /gyae/のようになる。それぞれの人称代名詞に属格助詞が実現された形/na ui/, /neo ui/, gue ui/, /uli ui/も可能であるが、属格助詞が表面上に現れない実現型の方がより多く使われるのである。これらの実現型を見てみると、格、意味のレベルにおいて異なる特徴を持っているにも関わらず、主格のものと同様の形を共有していることがわかる。このように人称代名詞の場合、属格助詞のプロトタイプの用法であると考えられる所有・所属等において「ui」が表面的に現れないことにより、他のカテゴリーの名詞でも省略可能になると考えられる。つまり、名詞句階層において左側に位置するカテゴリーの使用例がそれ以外のカテゴリーにも拡張したと言える。

日本語の場合を見てみると、人称代名詞が「ノ」に結合すると、「ノ」は結合したまま、実現型においても現れることになる。したがって、この影響により、「ノ」の省略が不可能になると考えられる。

3. 結論と今後の課題

本稿では、既存の研究によってそれほど議論されてこなかった日韓両言語における属格助詞の省略可否の原因について、名詞句階層に基づき議論を展開した。名詞句階層において上位に位置する代名詞の使用の影響により、両言語の属格助詞の省略可否が決められる。しかし、名詞句階層の影響以外にも、音韻論的に人称代名詞の主格形と同様の形を共有していることも一つの要因として考えられる。今後は、同様の現象を有するほかの言語にも目を向けより一般化ができるように考察を深めていく必要があると考えられる。

<主な参考文献>

- 伊藤英人(2013)「朝鮮語」『語学研究所論集』18、pp. 290-307. 東京外国語大学
 金恩愛(2003)「日本語の名詞志向構造と韓国語の動詞志向構造」『朝鮮学報』188、pp. 1-83. 朝鮮学会
 角田太作(1991、2009)『世界の言語と日本語－語類型論から見た日本語－』くろしお出版
 油谷幸利(2005)『日韓対照言語学入門』白帝社
 Kim, M. H. (1987). Semantic function of Korean particle {의(eui)}, *Korean Journal of Linguistics*, 12(2), pp. 248-260.

1. 序論

本研究の目的は、日本語話者と英語母語話者による英語発話リズムの違いを明らかにすることである。言語には、ほぼ等しい長さ（等時性）をもって発音される音のかたまりが存在し、その言語固有のリズムを生み出している。各言語のリズム特徴を解明するため、多くの研究がなされてきた。たとえば、日本語では拍が、英語では強勢の置かれた音節が、リズム単位として機能するとされる。ただし、どのような言語においても、リズム単位に厳密な等時性は確認されていない。近年、リズム特徴をより忠実に捉えるための物理的指標が提案されている(Ramus, Nespor & Mehler 1999; Low & Grabe 2002)。

本研究では、先行研究が提案する指標を、日本語母語話者による英語発話に適用する。日本語母語話者による英語発話と、英語母語話者による発話とのリズム上の相違を分析する。具体的には、①日本語話者と英語母語話者の発話リズムの違いが、各指標に基づいてどのように捉えられるか、②英語習熟度と発話リズムの「ネイティブらしさ」にはどのような関係があるか、という2つの課題を検討する。

2. 先行研究

本研究は、2つの先行研究が提案する指標を採用した。先行研究は、第一言語を研究対象とし、各言語につき1名分程度の発話データをもとにしている。本研究は、日本語母語話者にとっての第二言語としての英語を研究対象とし、大規模コーパスデータをもとに分析を行っている点で、以下の2つの先行研究とは異なる。

第1の先行研究は、Ramus, Nespor & Mehler (1999)によるものである。Ramusらは、3種類のリズム指標%V、 ΔV 、 ΔC を提唱した。Ramusらは、音響解析において、一連の発話を各母音と子音に区切った。そして、隣接する母音同士（または子音同士）の区間を融合し、一つの母音区間（または子音区間）と定義した。その上で、上記3種類の指標についてフレーズごとに数値を計測した。%Vは、そのフレーズの中で、母音区間が全体の時間長の何%を占めるかを示す。 $\Delta V \cdot \Delta C$ は、フレーズ内にある、全母音区間・子音区間それぞれの時間長のばらつきを示す。以上の指標を用いて、Ramusらは、音節リズム言語（syllable-timed languages, スペイン語等）、強勢リズム言語（stress-timed language, 英語等）、モーラリズム言語（mora-timed language, 日本語）間で、発話リズムの比較を行った。その結果、日本語は、（英語等を含む）強勢リズム言語よりも%Vが高く、 ΔC が低いことが示された。これは、音韻上許される子音連続の種類や長さが、日本語の方が限定され、個々の子音区間の長さが英語より短い傾向にあるためである。 ΔV については、日本語と強勢リズム言語の間に有意な差は見られなかった。

第2の先行研究は、Grabe & Low (2002)によるものである。Grabeらは、2種類のリズム指標 rPVI、nPVIを提案した。Ramusら同様に発話を母音区間と子音区間に分けた上で、独自の指標 PVI (the Pairwise Variability Indices)を定義した。前後の母音区間同士・または子音区間同士が持つ時間長のばらつきを計測し、それぞれ vocalic rPVI（以下、V-rPVI）、intervocalic rPVI（以下、C-rPVI）とした。V-rPVIは、相前後する音節に含ま

れる、2つの母音区間の時間長のばらつき度合を反映する。さらに Grabe らは、発話速度の変化が数値に与える影響を排除するため、nPVI (normalized PVI) を定義した。発話速度の正規化は、前後の母音区間同士（または子音区間同士）の時間長の差を、それらの平均で割るという手法で行われた。Grabe らは、発話速度正規化後の指標を、vocalic nPVI (以下 V-nPVI)、intervocalic nPVI (以下 C-nPVI) とした。Grabe らは、日本語は英語より V-nPVI が低く、C-nPVI には差がないことを示した。すなわち、日本語では、前後する母音区間の時間長が、英語より均等になる傾向にあることが示された。

本研究では、Ramus ら (1999) と Grabe & Low (2002) の指標を用いて、日本語母語話者と英語母語話者それぞれによる英語発話の発話リズムを数値化し、比較した。

3. 研究方法

本研究では、J-AESOP コーパス (Vischeglia et al., 2009) より、英語母語話者 16 名分、日本語母語話者 72 名分の英語発話データを分析した。各話者は英語文章“The North Wind and the Sun”の読み上げを行った。日本語母語話者データには、英語教師 8 名（英語母語話者 4 名・日本語母語話者 4 名）によって評定値が付与されている。各評定者は、各話者の発話全体の聴覚印象をもとに、1 (“very poor”) ~ 5 (“very good or nativelike”) の評定値 (0.5 点刻み) を付与した。各評定者が付与した評定値の平均を、その話者の最終的な評定値とした。この評定値をもとに、日本語母語話者データを 3 つの習熟度別話者グループ (上位 25 名が high、中間層 23 名が mid、下位 24 名が low) に分けた。

4. 分析方法

音響解析は、ソフトウェア Praat を用いて行った。各話者の発話をフレーズ・母音区間・子音区間に分けた。なお、二つのポーズ（無音区間）の間に挟まれた区間を 1 フレーズと定義した。そして、Ramus 指標 (%V, ΔV , ΔC) をフレーズごとに、Grabe 指標を話者ごとに計測した。統計分析はソフトウェア R を使用した。英語母語話者グループ (以下 native) を統制群とし、日本語母語話者 3 グループを実験群とした。これら 4 つの話者グループ間で ANOVA 分析 ($p=.05$, post hoc: the Bonferroni correlation test) を行い、日本語母語話者による英語発話リズムのネイティブらしさと、全般的な英語習熟度の関連を検証した。

5. 研究結果と考察

5.1. Ramus 指標 : %V, ΔV , ΔC

各話者の発話をフレーズに分け、各フレーズについて %V, ΔV , ΔC を計測し、話者グループ間で結果を比較した。

%V・ ΔV は、全てのグループ間に有意差がみられた。%V・ ΔV とともに、native でもっとも低く、high、mid、low の順で高くなった。したがって、%V・ ΔV は、習熟度に伴って、より英語母語話者らしい特徴に近づくと考察できる。Ramus らの結果と比較すると、日本語母語話者の %V が英語母語話者に比べて高いという傾向は、日本語からの母語干渉によると説明づけられる。 ΔV が日本語母語話者で高い理由は、英語の長母音や強勢母音を、日本語母語話者が主に母音の時間長を伸ばすことで表現しているためと考

えられる。英語母語話者の発話においては、これらの母音を弱母音との区別は、時間長だけでなく母音の質・ピッチ・強度の変化によって実現される (Lee, Guion & Harada 2006)。本研究の結果は、日本語母語話者が、英語発話において強勢を示す際、時間長の変化に依存する傾向にあることを示している。特に、 $\%V \cdot \Delta V$ がいずれも英語母語話者より高い数値を示していることから、日本語話者の発話には極端に長い母音区間が含まれていると推測される。また、英語習熟度が上がるにつれて、よりネイティブらしい時間長制御を習得することが示唆される。

ΔC については、いずれのグループ間においても、有意差はみられなかった。第一の原因として、母音のみで構成される(子音を含まない)フレーズが、日本語母語話者(特に low) の発話において散見され、統計結果に影響していることが考えられた。そこで、該当するフレーズを統計分析の対象から外し、再検定を行った。しかし結果は変わらず、 ΔC はグループ間での有意差はみられなかった。これを踏まえると、テキストに含まれる子音連続の長さ自体にばらつき(子音 1~4 個)があることが原因であると推測される。テキストの影響で、各話者個人内での ΔC の値の分散が大きくなり、結果として母語グループ間での有意差が見られなかったと考えられる。

5.2. Grabe 指標 : rPVI, n PVI

各話者について、V-rPVI、C-rPVI、V-nPVI、C-nPVI をそれぞれ計測し、話者グループ間で結果を比較した。

母音について、V-rPVI は、native がもっとも低く、high、mid、low との間にそれぞれ有意差がみられた。日本語母語話者同士の間には有意差はみられなかった。つまり、習熟度が上がっても英語母語話者らしい V-rPVI が達成されていないことがわかった。次に、Grabe らの手法に則り、母音区間の nPVI (V-nPVI) を計測したところ、いずれのグループ間にも有意差はみられなくなった。つまり、発話速度の変化が及ぼす影響を排除すると、英語母語話者と日本語母語話者の統計上の違いがみられなくなった。この結果については 2 つの解釈が可能である。第 1 に、日本語母語話者の英語発話リズムは、発話速度が不安定であるという点自体において特徴的であると解釈できる。英語習熟度が高い話者ほど安定した速度でテキストを音読でき、よりネイティブらしい発話リズムを実現していると考えられる。第 2 に、日本語母語話者が、英語母語話者とは異なる時間長制御を行っているという解釈も可能である。上述した通り、Grabe らによる発話速度の正規化は、前後する母音区間同士(または子音区間同士)の時間長の平均をもとに行われている。この手法は、「各区間の時間長が短縮・伸長されるのは、発話の増減が原因である」という前提の上に採用されている。しかし、非母語話者の場合、各区間の時間長の短縮・伸長(意識的あるいは無意識的に)行われている可能性もある。そのため、Grabe らが提案する手法では、非母語話者特有の時間長制御が看過されるおそれがある。

子音について、C-rPVI は、native と mid、native と low の間にのみ有意差がみられた。C-rPVI は native がもっとも低く、日本語母語話者の習熟度が上がるにつれて、低くなった。次に、C-nPVI (発話速度を正規化) については、native と low の間のみ有意な差がみられた。C-rPVI、C-nPVI いずれについても、習熟度が上がるにつれて、英語母語話者のリズム特徴に近づく傾向がみられた。C-rPVI の結果より、英語習得度が低い日本語母語話者 (mid, low) の英語発話では、前後の子音区間同士の時間長がよりばらつく

傾向があることがわかった。原因としては、英語の子音連続の発音（例：stronger の下線部）に不慣れな日本語話者は、子音連続の時間長を詰めて発音できていないことが考えられる。ただし、C-nPVI については、発話速度の正規化を子音区間に適用する措置は妥当でないと判断される。ΔC で述べたように、子音区間の時間長は、（発話速度よりも）テキストに含まれる子音連続の長さに依存するためである。

6. まとめ

本研究では、①日本語母語話者と英語母語話者の英語発話リズムの違い、②英語習熟度と発話リズムの「ネイティブらしさ」の関係、という2つの課題を検討してきた。以下では、母音区間に注目した指標（%V、ΔV、V-rPVI）、子音区間に注目した指標（ΔC、C-rPVI、C-nPVI）それぞれについて、まとめと英語学習上の示唆を示す。

母音区間に注目する指標では、日本語母語話者と英語母語話者との英語発話リズムの違いが（特に%V、ΔV、V-rPVIで）顕著に捉えられた。英語習熟度が上がるにつれ、よりネイティブらしい発話リズムが実現されている一方で、高い習熟度の話者でも、英語母語話者との完全な一致は見られなかった。また、日本語話者による英語発話では、極端に長い母音区間が存在することが示唆された。したがって、日本語話者が英語の発音練習を行う際、母音を伸ばしすぎていないか注意すると、よりネイティブらしい発話リズムで発音できると期待される。

子音区間に注目した指標については、全体の傾向として、母語や習熟度による違いは不明確であった。テキストが規定する子音連続の長さに、結果が影響されやすいという、方法論上の限界がみられた。各話者内（Ramusらの指標）・各話者グループ内（Grabeらの指標）での数値の分散が大きくなったことで、グループ間での発話リズムの相違が捉えにくかったと推測される。その一方で、日本語母語話者が、子音連続の発音を苦手とする傾向にあることが確認された。英語の音韻規則では、日本語よりも長い子音連続が許容される。そのため、日本語母語話者がネイティブらしい英語発話リズムを習得するためには、子音連続の発音を意識することが効果的であると期待される。具体的には連続する子音の数が多い場合でも、その子音連続全体の長さが冗長にならないよう留意するとよいと考えられる。

7. 主要参考文献

- Grabe, E., & Low, E. L. (2002). Durational Variability in Speech and the Rhythm Class Hypothesis, *Laboratory Phonology* 7, 515–546.
- Lee, B., Guion, S. G., & Harada, T. (2006). Acoustic Analysis of the Production of Unstressed English Vowels By Early and Late Korean and Japanese Bilinguals. *Studies in Second Language Acquisition*, 28(03), 487–513.
- Ramus, F., Nespor, M. & Mehler, J. (1999). Correlates of linguistic rhythm in the speech signal, *Cognition* 73, 255-292.
- Vischeglia, T., Tseng, C., Kondo, M., Meng, H. & Sagisaka, Y. (2009). Phonetic Aspects of Content Design in AESOP (Asian English Speech cOrpus Project), *Oriental COCOSDA* (Beijing, China, 10-12 August, 2009). 52-57.

日本語の単純語短縮と情報伝達部分の「長さ」

早稲田大学大学院修士 2 年 富田卓馬

0. はじめに

日本語には様々な短縮(語)がある。その 1 つに単純語短縮があり、これは「イラストレーション」→「イラスト」のように、外来語(あるいはそれに準ずるもの)¹ 語に対して起こる。これまで主に音韻論の観点から論じられ、その特徴が明らかになっているが、例外的な短縮については子細に検討されていないようである。本稿では、一般的な特徴に反する短縮語を多く擁するポケットモンスターのキャラクターの単純語短縮に注目し、その一部が「情報伝達部分の長さ」のために生じることを、実験を通して検討する。

1. 先行研究 — 単純語短縮の特徴

1.1 元の語の長さと短縮形の長さ

短縮といっても、ただ短くすれば良いわけではなく、短縮形の長さには制限がある。Itô (1990) によると、この長さは 2 モーラ以上 4 モーラ以下である。また、最低でも 2 音節が必要となる。同じ 2 モーラでも 1 音節は短縮形として許容されないことから、Itô は 2 音節が語として使用できる最低の長さであるとしている。また、「パーソナルコンピュータ」→「パソコン」のような複合語短縮を挙げて、2 モーラを形態素の基本単位としている。さらに、単純語短縮が起こるためには元の語にもある程度の長さが要求される。窪菌 (2010) は複合語及び外来語のアクセントの研究から、5 モーラ以上の単純語は複合語構造を持ち、単純語短縮をこれに対して行われる省略とした。ただし、実際には「ネガティブ」→「ネガ」のような 4 モーラ語の短縮も見られる。

1.2 単純語短縮の形の予測

単純語短縮には元の語及び短縮形の長さに関わる制限に加えて、採用位置の制限もある。大抵の場合、短縮形には前半部分が採用され、後半部分(「アルバイト」→「バイト」)はほとんど見られない。こうした後半採用の短縮形は特殊な文脈で起こりやすいようである(窪菌 2002)。以上のように、短縮の起こる語の長さ、短縮形の長さと位置はわかっているが、その一方で、個々の語から現れる短縮形の予測は困難とされる。窪菌・小川 (2005) は実験を行い、「音節を分断しない」、「後半が長くなってはならない」という 2 つの特徴を報告している。窪菌 (2010) はこれを基に「短縮形は音節を分断しないように可能な限り半分の長さに、それが無理なら前半を長くして造られる」と短縮形の予測を試みたが、「アスパラガス」→「アスパラ」(*「アスパ」)や「バスケット」→「バスケ」(*「バス」)など、実際にはこれに従わない語もあるとしている。

2. 可能な短縮形と例外的な短縮形

2.1 可能な短縮形

以上のように短縮語の予測は困難であるが、可能な形を定義することは可能であるよ

うに見える。本研究では、これまでに報告されている特徴や疑似複合語説から、単純語短縮は以下の条件さえ満たせば可能であると考ええる。つまり、これにより造られる形を単純語短縮による短縮形とする。

(1) 単純語短縮の条件

- a. 短縮形(語)として 2 音節以上 4 モーラ以下を取る。
- b. 形態素として最低の長さである 2 モーラ以上を省略する。

単純語短縮を疑似複合語に対する省略と考えると、Itô (1990) による形態単位を省略しつつ、語として使用できる 2 音節以上 4 モーラ以下を取ることが出来れば単純語短縮は可能と考えられる。この 2 つの条件を満たす最低の長さは 4 モーラ語だから、「ネガティブ」→「ネガ」のような短縮が起こる理由も理解できる。一方で、(1) は異なる長さを持つ複数の短縮形を許すために、モーラや音節の長さによる短縮形の予測はできないが、これはむしろデータの特徴を捉えている。例えば、5 モーラの語からは 2 モーラと 3 モーラの短縮形が現れうる。これらの可能な複数の候補から特定のものが短縮形となるのは、個人差はあるだろうが、例えば「言いやすさ」や「使用の状況」などといった、モーラや音節以外の要因によると考えられる。

2.2 ポケモンの名前の短縮形

一般的な語の短縮形が最終的に何によって決定されるかははっきりとはわからないが、特殊な語についてはその限りでない。「ポケットモンスター」のキャラクター名の短縮語では「語の区別」が重要であるように思われる。

(2) ポケモンの短縮例（下線は共通部分、太線は弁別部分、括弧内は共通部分を持つ語）

- a. クロバット → クロバ (ズバット、ゴルバット)
- b. メタグロス → グロス (メタング)

ポケモンの名前には関連するキャラクター名に同じ部分を持たせて関連性を示すものが多く、それらの短縮形には「他の語と区別できる部分を含む形」が採用される傾向にあるが、ただ区別できれば良いのではなく、区別できる部分の位置により、その形が決まっているようである。他の関連語と区別する部分が先に来る (2)a. の場合、窪菌 (2010) の主張に従うようだが、後に来る (2)b. では異なる部分がそのまま使用されているように見える。

3. 実験

3.1 実験方法

ポケモンの名前では区別できる部分の位置が短縮に重要に見えるが、その理由はわからない。また、日本語母語話者一般にあてはまるかも疑問である。そこで、これらを実験を通して検討する。実験はテスト形式で、18 才から 35 才の日本語母語話者 29 名に

対して行った。問題は重音節を含まない無意味語のペアから成り、それらの語は同じ部分（以下 M ）と異なる部分（以下 μ ）を持つ。語及び M / μ 部分の「長さ」と μ 部分の「位置」による解答の違いを見るため、様々な長さで順序の無意味語ペアを用意した。語の長さは 4 モーラから 7 モーラまでで、位置については $M\mu$ と μM の 2 通りを用意した。各部分の長さは 2 モーラ以上である。無意味語と各部分の長さの最低値は (1) を想定して設定した。また、無意味語の長さの最大値が 7 モーラであるのは、問題パターンが膨大になることを避けるためである。同じ理由で、ペアになっている語はすべて同じ位置と長さを持つ。例えば、一方が $M\mu$ 順で 2+3 モーラならば、もう一方もこれと同じである。この条件でできる組み合わせは 20 通りあり、各組み合わせは 3 問ずつ用意した（合計 60 問 / 120 語）。参加者は提示された各語を短くするように指示され、解答を選択肢から選ぶ。ただし、ペア間で区別できる形を選ぶ必要がある。選択肢には (1) で可能なすべての候補が用意されており、もし選択肢に解答がない場合には記述欄に書けるが、その場合でも必ず選択肢から 1 つ選ばなければならない。

(3) 無意味語のペア例 (7 モーラ語 : M 部分 5 モーラ + μ 部分 2 モーラ)

(i) メリアサラピキ

(ii) メリアサラテコ

3.2 結果の分析

個人差が予想されるため、結果の分析は、全体の傾向を見た後でそれを基に参加者別に行った。まず、各組み合わせに用意されている 6 語の内 4 語以上を占めるものについて、これを解答とした。それがない場合、その組み合わせの解答は不明とした。このようにして得られた最大 20 の解答を基に個々に分析を行った結果、参加者全体の傾向として、「短縮形の μ 部分が M 部分より短くてはならない」 ($*M > \mu$) と「短縮形がそうでない部分より短くてはならない」 ($*Rest > Target$) の 2 つが見られた。以下では、参加者 16 (S-16) の $M\mu$ 順 5 モーラ語の解答を例としてこの特徴を見る。

(4)は窪菌・小川 (2005) の実験結果から予想される結果と S-16 の解答の一部である。数字は $x+y$ の形で各部分のモーラ数を、 M 及び μ はそれぞれ 1 文字で 1 モーラを表す。(4)では前半と後半のうち解答を太字のイタリックで表す。また、文中で解答を表す場合、前半を F (Former)、後半を L (Latter) で表し、そのモーラ数を表す数字と併記する。例えば、(4)の右列上段は S-16 が $M\mu$ 順の 2+3 の組み合わせ ($MM+\mu\mu\mu$) の 4 / 6 語以上で後半 3 モーラ ($3 \times L$) を解答したことを表す。

(4) 窪菌 (2010) から予想される結果と S-16 の解答 ($M\mu$ 順 5 モーラ語のみ)

テスト語($M\mu$ 順)	予想解答		S-16	
	前半	後半	前半	後半
2+3 ($MM+\mu\mu\mu$)	<i>MMμ</i>	$\mu\mu$	MM	<i>$\mu\mu\mu$</i>
3+2 ($MMM+\mu\mu$)	MMM	<i>$\mu\mu$</i>	MM	<i>M$\mu\mu$</i>

S-16 では、 $M\mu$ 順 5 モーラ語で予測される形とは異なるものが現れている。まず、

2+3 の組み合わせからは $3 \times F$ (MM μ) が予想されるが、実際の形は $3 \times L$ ($\mu\mu\mu$) である。通常の分け方は 3+2 だから、これは普通でない分け方をして、一般的でない後半をとっていることになる。もし、後半をとるだけで良いなら、 $2 \times L$ ($\mu\mu$) で良いが、 $3 \times L$ ($\mu\mu\mu$) であることから、*Rest > Target が想定される。また、もし *Rest > Target だけで良いなら、 $3 \times F$ (MM μ) で良いが、 $3 \times L$ ($\mu\mu\mu$) であることから、*M > μ も想定される。これら 2 つの制限は働く単位こそ異なるが、どちらも「*非情報伝達部 > 情報伝達部」という形式である。他の参加者についても同様に分析を進めた結果、*M > μ と *Rest > Target はともに 15 / 23 人、どちらか一方でも持つものは 19 / 23 人で確認された。後者については、二項検定で $p = 0.01$ で有意差が見られた。

なお、選択肢以外の解答も確認されたが、全 3480 語に対して 159 語しか見られなかった。これらの解答は、短縮無し、複合語短縮(及びそれに準ずるもの)、語末または語頭 1 モーラの省略のいずれかによる。詳細、及びその他の特徴については割愛する。

4. まとめ

実験から、単純語短縮の例外的な語を引き起こす要因の 1 つには「情報伝達部分」が関わっており、その部分は重要でない部分と比べて「短くてはならない」と考えられる。話者の多くにこの特徴が見られることから、特殊な状況下において日本語母語話者が一般に取る対応策の 1 つに「情報伝達部分は短くてはならない」があると考えられる。ポケモンの名前の一部も実験で用いた無意味語と同じ特徴を持つから、その短縮形の一部もこれに従って現れたと推測される。

主要参考文献

- Itô Junko (1990). Prosodic Minimality in Japanese, In K. Deaton, M. Noske & M. Ziolkowski (eds.) *CLS 26-II: Papers from Parasession on the Syllable in Phonetics and Phonology*, pp.213-219.
- 窪菌晴夫 (2002) 『新語はこうして作られる』 東京：岩波書店.
- 窪菌晴夫・小川晋史 (2005) 「「ストライキ」はなぜ「スト」か — 短縮と単語分節のメカニズム —」、大石強、西原哲雄、豊島庸二 (編) 『現代形態論の潮流』 155-174. 東京：くろしお出版.
- 窪菌晴夫 (2010) 「語形成と音韻構造—短縮語形成のメカニズム—」 *NINJAL Project Review* (3), 17-34. 国立国語研究所.
- 佐藤大和 (2002) 「外来語における音節複合への区分化とアクセント」 『音声研究』 6 (1) : 67-78. 日本音声学会.
- Labrune Laurence (2002). The Prosodic Structure of Simple Abbreviated Loanwords in Japanese: A Constraints-based Account, *Journal of the Phonetic Society of Japan* 6 (1), 99-120

「遠近」の概念に基づくメタファー表現の分析

愛知県立尾西高等学校（非）・津島高等学校（定・非） 萩原伸一郎

0.はじめに

日本語において距離的な位置関係を示す表現は「遠い」と「近い」が典型的である。物理的用法としての「遠い」と「近い」を基盤にして様々なメタファー表現が存在する。「遠い」や「近い」がメタファー表現として時間的・心理的な距離感を示す用法は『広辞苑』、山梨(2009)等で記載されている。物理的な遠近の概念に基づく類似性や時の概念化についてはLakoff & Johnson (1980,1999)などでも説明されている。その他日本語のメタファー表現に関しては瀬戸(1995)や鍋島(2011)などの先行研究が存在する。ところが、「トイレが近い」という日本語特有の表現は筆者の知る限り体系的に分析された研究が存在せず、心理的あるいは類似性などの観点では説明が困難である。また、「目が近い」や「耳が遠い」のように日本語には遠近の概念が用いられた慣用表現が多数存在する。そこで、本稿では距離的な位置関係を示す「遠近」（「遠い」と「近い」）が用いられた日本語の慣用表現・メタファー表現を例に挙げ、物理的距離感を示す「遠い」と「近い」が時間的・心理的な距離感およびその他の概念に転用されるメカニズムを我々人間の経験的基盤・認識体系に基づいて論述する。

1.「遠い」と「近い」がもつ概念

1.1「遠い」と「近い」の定義および分類

「遠い」と「近い」が用いられた言語表現は数多く存在する。具体例として次の(1)-(3)のような表現が挙げられる。

- | | | |
|--------------|---------|-------------------------------|
| (1) 「距離が近い」 | ・「遠い所」 | 根源的（物理的用法） |
| (2) 「投票日が近い」 | ・「遠い昔」 | Time Is Space メタファー |
| (3) 「近親者」 | ・「遠い親戚」 | Similarity Is Closeness メタファー |

(1)は物理的空間における隔たりの大小が示されている例であり、根源的な用法である。そこからメタファー用法として(2)や(3)のように時や類似性を示す際にも物理的距離感の概念が用いられている例が見られる。『広辞苑』では意味概念に応じて分類され、それぞれが定義されている。

(4)【近い】

- ①距離のへだたりが小さい。遠くない
- ②時間のへだたりが小さい。
- ③よく見知っている。
- ④心と心のとのへだたりが少ない。
- ⑤血縁が遠くない。
身寄りである。身内である。
- ⑥物事の形状・内容・性質が似ている。
- ⑦ある数量にもう少しで届く。
- ⑧近視である。「目が一・い」

(5)【遠い】

- ①空間的に、隔たりが大きい。
- ②時間的に隔たりが大きい。
- ③なかなかそうならない。
その段階に達するにはまだまだである。
- ④ア関係があまりない イ血縁関係が薄い ウ親しくない
- ⑤性質や内容が似ていない。
- ⑥ア意識がはっきりしない。また、程度が激しすぎて、
意識を失うほどである。イ遠視である
ウ聴覚が弱い。また、よく聞こえない。
「電話が遠い」「耳が遠い」

－『広辞苑』

「近い」と「遠い」それぞれにおいて①が根源的つまり物理的用法である。そこから拡張的な用法として②の **Time Is Space** メタファー、「近い」の⑤、⑥および「遠い」の④、⑤の **Similarity Is Closeness** メタファー、そして慣用表現という形で分類されている。

1.2. 時間的距離感について

時が物理的空間の概念で捉えられ **Time Is Space** メタファーが成立することは Lakoff & Johnson (1980,1999)などで述べられている。時と物理的な距離との関係について次のように説明されている。

(6) If we are close to Location A, then we have only a short distance to travel to reach Location A.

(7) If we are close to Time A, then we have only a short time to wait to reach Time A.

—Lakoff & Johnson (1999:147)

発話時と参照時 A の隣接が発話者のいる地点と A 地点の物理的な隣接の概念で捉えられている。日常生活においてある場所から別の場所に移動する際には時の経過が伴っている。移動距離に応じて経過する時の長さも異なるため、時と物理的な距離の概念は密接につながっていると言える。

2. 「遠い」と「近い」の概念が用いられた表現の分析

2.1. 「近くなる」について

時間的あるいは心理的な変化が「ーが近くなる」という形で物理的空間における隔たりの縮小の概念で捉えられる例が存在する。

(8) 静岡から横浜に移り住んで東京が近くなった

(9) 正午近くになってようやく試合が始まった

(10) 新幹線の開業で北陸が近くなる

(8)は根源的な用法であり、発話者の居住地が東京に移ることにより物理的な距離が縮まることが示されている。(9)は時の経過が物理的な距離の縮小の観点で捉えられた **Time Is Space** メタファーの例である。(10)は(8)とは異なり文字通り他の地域と北陸の物理的な距離が縮まるのではなく、1.2 で検討したように移動時間の短縮が位置的な近接の概念で捉えられ、実際には離れている場所が身近になり心理的に近くなることが示される。ところが、次の(11)のような例は(8)のように時間的・心理的距離感の視点で解釈することができない。

(11) 冬になるとトイレが近くなる

トイレに行く回数が増えることを示すのに「トイレが近くなる(近い) 1)」という表現が用いられるが、文字通り人とトイレとの物理的な距離が縮まるのではない。我々人間にとってトイレが身近な存在になり心理的に近くなる、あるいはトイレまでの所用時間が短くなるという解釈も当てはまらない。また、『広辞苑』に記載されている定義・分類のいずれにも該当せず、**Time Is Space** メタファーや **Similarity Is Closeness** メタファーであるとは考えられない。この表現を説明するためには「近い」と対極的な概念を表す「遠い」が用いられた表現の分析が有効であると考えられる。

(12) 最近 A さんと B さんは疎遠になっている

関係が途絶えがちになることを示すのに「疎遠になる」という表現が用いられる。この表現は二者間に心理的な距離ができることだけでなく、対面や文通などの頻度が低下することを示している。このように疎密の概念に基づくと、(11)のようにトイレに行く頻度が高くなることは尿意の時間的間隔が狭くなることであり、時間的間隔が狭くなることは物理的な近接の概念と並行すると考えられる。図式化すると次のようになる。

(13)  ※●:尿意 (トイレに行く時)

2.2. 「遠近」の概念が用いられたその他の慣用表現

2.1.で検討した表現の他にも「遠い」と「近い」が用いられた慣用表現が数多く存在する。

(14)目が近い

(15)耳が遠い

(14)の「目が近い」という表現は近視であり視覚行為で捉えられる範囲が狭いことを示す。文字通りある対象物と目の物理的距離が近いのではなく、視覚をつかさどる感覚器官としての目で視界の及ぶ範囲を示すというようにメトニミー的な解釈が可能であると考えられる。(15)の「耳が遠い」は難聴であり聴力が低いことを示す。この場合も文字通りある対象物と耳の物理的距離が遠いのではない。観察者が音声の発信源から遠い位置にいれば音声を捉えにくいという経験的基盤により難聴であることを物理的な距離の観点で捉えられると考えられる。

3.まとめ

日本語には「遠い」と「近い」つまり物理的な距離の概念を基盤にしたメタファー表現が数多く存在する。我々人間の経験的基盤および認識体系に基づいて検討するとそれぞれの表現を体系的に分析できると考えられる。遠近の概念に基づくその他のメタファー表現や英語の ‘far’や ‘close’を用いたメタファー表現については今後の研究課題とする。

〈注〉

1 同様の内容を示す「尿意が近くなる(近い)」という表現も同じ捉え方ができる。「*風邪が近くなる」や「*怪我が近くなる」のような表現は日常的な生理現象ではなく尿意に比べると頻出しないため不自然であると考えられる。

〈主要参考文献〉

- Lakoff, G. & M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. & M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought*. Basic Books. New York.
- Langacker, R. (1991) *Foundation of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Stanford University Press. California.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics* vols.1-2. MIT Press. Cambridge
- 上野義和(編)(2002)『認知意味論の諸相 身体性と空間の認識』松柏社. 東京.
- 新村 出(編集)(1998)『広辞苑』第五版
- 瀬戸賢一 (1995)『メタファー思考』講談社. 東京.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』くろしお出版. 東京.
- 安井泉 (2010)『ことばから文化へー文化がことばの中で息を潜めているー』開拓社. 東京.
- 山梨正明 (2009)『認知構文論』大修館書店. 東京.

〈謝辞〉

言語文化教育学会第 15 回記念大会での口頭発表の際に、理事の中井基博先生、矢野安剛先生など数多くの先生方に貴重な御助言を頂きましたことに御礼申し上げます。また、大会参加にあたって事務局の深田嘉昭先生をはじめ多くの先生方にお世話になったことに御礼申し上げます。なお、本稿の不備、誤りは全て筆者の責任である。

2015 年度活動記録

JATLaC 言語文化教育学会 2015年度 定例シンポジウム

日時：2015年7月25日 午後1時30分～5時30分

場所：早稲田大学早稲田キャンパス11号館7階705教室

タイトル：「E-learningの現状とこれから」

コーディネーター：中野美知子氏（早稲田大学名誉教授・当学会理事）

パネリスト：

大和田 和治 氏	（東京音楽大学）
荊 紅涛 氏	（早稲田大学）
後藤 裕介 氏	（岩手県立大学）
近藤 悠介 氏	（早稲田大学）
吉田 諭史 氏	（早稲田大学）

概要：近年急激に広まっている遠隔教育は、言語教育ではどのように活用されているのか。今回のシンポジウムでは、それらの具体的事例を元に、現状と問題点、課題などについて議論を行いたい。授業における活用、ネットを通じた交流活動、テスト、mobileの活用など、英語教育における多様な実践例を紹介、その効果、問題点、多言語への活用などを議論する。また、東日本大震災後の被災地支援における実践も紹介する。

JATLaC 言語文化教育学会 第15回記念大会(2015)

日時：2015年 11月21日（土）・22日（日）

会場：早稲田大学早稲田キャンパス 11号館5階501/504教室

使用言語：日本語

・11月21日（土） 11号館5階501教室

10：30-12：00 基調講演

白井 克彦 氏（早稲田大学前総長・放送大学学園理事長）

「グローバル化・デジタル化によって変わる学習環境（仮題）」

13：30-17：30 シンポジウム

「グローバル化・デジタル化によって変わる外国語学習空間」

留学生の増大により大学キャンパスの多言語化が一気に進んでいる。

その結果、多言語化したキャンパス自体が外国語学習（コミュニケーション）の格好の空間になっている。一方でインターネット環境の急速な発展により、テレビ会議システムで海外の教室と結ぶことでこれまでにない新たな外国語学習（コミュニケーション）空間が登場した。ここ十年ほどで広がる新たな外国語学習（コミュニケーション）空間は、外国語学習のあり方を大きく変えつつある。

本シンポジウムでは、大学キャンパスの多言語環境を利用した外国語教育・学習の具体例およびテレビ会議システムを利用した外国語教育・空間の具体例を報告してもらい、それらの事例報告を踏まえて、新たな外国語学習空間の出現により、外国語の学びがどのように変わったのか／変わっていくのか／変わっていくべきかを皆さんと一緒に考えたい。

今回の事例報告は、教育のグローバル化・デジタル化にいち早く取り組んでいる早稲田大学での事例を取り上げる。

コーディネーター：村上公一氏（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

パネリスト：

ロバート・ハチンズ氏、加藤真理子氏（早稲田大学国際コミュニティーセンター（ICC）職員）

キャンパスの多言語・多文化環境を活用したランゲージ&カルチャー・エクスチェンジなど、異言語、異文化交流を中心とした活動についての報告

近藤真理子氏（早稲田大学国際学術院教授）日本人学生と留学生が混在する教育現場（日本人学生と留学生が「英語で学ぶ空間」）についての報告

中野美知子氏（早稲田大学名誉教授）ネットワーク上での1対1の交流学习（英語教育）についての報告

砂岡和子氏（早稲田大学政治経済学術院教授）ネットワーク上での多対多のディスカッション（中国語教育）についての報告

コメンテーター：

神尾達之氏（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

・11月22日（日） 11号館5階504教室

個人発表

10：00-10：30 金 台永（早稲田大学大学院）
韓国語の属格助詞「ui」の随意性

10：30-11：00 尾崎 友泉（早稲田大学大学院）
日本語母語話者による英語発話リズム—J-AESOP コーパスをもとに—

11：10-11：40 富田 卓馬（早稲田大学大学院）
日本語の単純語短縮と情報伝達部分の「長さ」

11：40-12：10 萩原 伸一郎（愛知県立尾西高校他）
「遠近」の概念に基づくメタファー表現の一考察

閉会式 ： 12：10-12：30

言語文化教育学会設立趣意書

大学における言語教育は、言語学や文学などの専門家の手に委ねられている場合が多い。言語教育そのものを直接の専門とはしない人々が教育の効果をあげるために工夫を重ね、努力してきた。その経験を言語教育の専門家も交えて分かち合い、相互啓発の場を設けた。同時に、今後言語教育に携わる者への研修を兼ねることで、教員養成改革へ一石を投じることも目的とし、言語文化教育学会（以下、本学会）を設立する。

言語教育は分析的であると同時に総合的な性格をもつ。したがって、学問分野がより専門化し、細分化と深化による分岐が進む時代に、本学会は言語教育という共通の基盤に立ち、教える言語の差異を超えて、異なる分野の専門家に討論と相互啓発の場を提供する。

本学会は、学際的であるだけでなく、「職際的」な性格をもつ開かれた学会を志向する。したがって、言語教育に携わっている人の他に、学習者や社会人も含め、言語教育に関心のあるすべての人に参加を呼びかける。

本学会は、講演会や討論会を開催することによって、専門や立場を異にする参加者が自由に言語教育の諸相を論じ、言語教育への認識を深めることを主な活動とする。内容としては、言語教育における言語と文化の関係を中心に、言語と心理、言語と社会、言語とコミュニケーション、言語と情報などを論じる。

本学会の前身である「早稲田大学言語教育研究会」は 1996 年より、言語の違いを越えた言語教育者間の知識の共有を目的として、国内外の研究者による講演会を企画・運営してきた。同研究会はその理念を引き継ぐ本学会の設立とともに、発展的に解消する。

《学会理事》

池田 雅之	(早稲田大学：英語・比較文学/比較基層文化論)
一森 俊明	(東京大学・元日本航空：フランス語・言語学)
浮田 三郎	(広島大学名誉教授：ギリシャ語・言語学)
岡田 浩平	(早稲田大学名誉教授：ドイツ語・ドイツ文学)
川口 義一	(早稲田大学名誉教授：日本語・言語教育)
河住 有希子	(日本工業大学：日本語・言語教育)
佐藤 巨呂	(大学書林国際語学センター)
志野 文乃	(早稲田大学大学院生：英語・英語教育)
Snowden, Paul	(杏林大学：英語・比較言語学)
徳永 美暁	(元昭和女子大学教授：日本語・言語学)
中井 基博	(東京国際大学：英語・英語教育)
中野 美知子	(早稲田大学名誉教授：英語・英語教育)
生井 健一	(早稲田大学：英語・言語学)
深田 嘉昭	(元武蔵野大学他：日本語・言語教育) 事務局
福田 育弘	(早稲田大学：フランス語・フランス文学)
藤村 泰司	(元国際大学教授：日本語・日本語学)
Berendt, Erich	(清泉女子大学名誉教授：英語・社会言語学)
村上 公一	(早稲田大学：中国語・中国語教育学)
村田 久美子	(早稲田大学：英語・異文化コミュニケーション)
本橋 幸康	(埼玉大学：国語・国語教育)
矢野 安剛	(早稲田大学名誉教授：英語・応用言語学)

〈50 音順〉

言語文化教育学会
(The Japan Association of Teaching Language and Culture)
会則

第1条：(名称)

本会の名称は言語文化教育学会(JATLaC: The Japan Association of Teaching Language and Culture)とする。以下、本会と記す。

第2条：(目的)

本会は、わが国における言語文化教育の発展と向上に資するための調査・研究を目的とする。

第3条：(事業)

本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 大会、その他研究集会の開催
2. ニュースレターおよび学会誌の発行、ホームページの運営
3. その他本会の目的を達成するための事業

第4条：(会員)

本会の会員は年齢、職業、身分、性別の一切を問わず、第2条の目的に関心をもつ者で構成され、正会員、学生会員、賛助会員からなる。

1. 正会員
2. 学生会員
3. 賛助会員

第5条：(会費・会計)

会員は会費を納入するものとする。会費の額は理事会が提案し、会員総会において審議、決定する。

会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

予算案および収支決算書は、会計監査担当の理事が監査し、総会で承認を得る。

第6条：(役員)

本会に会長1名、理事を若干名置く。

1. 理事は会員より選出されるものとする。任期は3年とし、再任を妨げない。
2. 会長は理事の互選により選出され、会務を統括し、本会を代表する。

第7条：(総会・理事会)

本会に総会、理事会を置く。

総会は、正会員、学生会員をもって組織し、原則として年1回、会長が招集する。総会は、本会の議決機関として本会の事業および運営に関する重要事項を審議決定する。また、理事会は必要に応じて臨時総会を開催することができる。

理事会は、会長および理事をもって組織し、第3条に定める事業ならびに収支予算および収支決算に責任を負い、執行の任に当たる。

第8条：(事務局)

本会は、事務局を早稲田大学内に置く。

第9条：(改正)

会則は、総会出席者の3分の2以上の同意を得て改正することができる。

付則：この会則は、2001年10月27日の本会第1回大会の総会において制定し、その日より発効する。

言語文化教育学会のご案内

当学会は2001年10月27日の会員総会において、正式に発足いたしました。

本学会の特徴として、第1は、日本語であれ、英語であれ、フランス語であれ、中国語であれ、教え、学ぶ言語文化の種類を問わず、言語教育・学習に携わる者、あるいは関心をもつ者が集まって相互に啓蒙しあい、意識を高め、言語教育の改善に向けて発言していくという「横断性」。第2は、文学、言語学、社会学など様々な分野の専門家がそれぞれの立場から意見を出しあい、議論し、学びあう「学際性」。第3は、学生とか、主婦とか、退職者とかの身分や教員とか企業人とか自由業者などの職種を問わない集団が様々な、異なる立場から言語教育を語りあう「職際性」。最後に、人種・民族や障害の有無を越えて、手話や点字や自閉症者のコミュニケーション補助言語など、障害者のコミュニケーション補助なども含めた言語教育を語っていく「異際性」が挙げられます。

本学会は、言語文化教育に関心をもつ人々が異なる立場から異なる意見をもちより、自由に議論し、言語文化教育に対する意識を高めあい、啓発しあい、後進の指導にあたることを目指しております。

言語文化教育にご興味をお持ちの多くのかたのご参加をお待ちしております。

言語文化教育学会 会長 矢野 安剛

言語文化教育学会入会案内

本学会は言語教育に携わっている方だけでなく、社会人や学習者など、言語教育に関心を持つすべての人に参加を呼びかけております。したがって、本学会には、本学会の趣旨に賛同なさる方でしたら、どなたでも入会いただけます。

入会を御希望の方は、入会申込書、会員登録用紙に必要事項を御記入のうえご提出ください。なお、本学会の連絡は、原則として電子メールでいたしますので、メールアドレスの御記入をお忘れなく。また、会費は、原則として学会の口座へ振り込んでいただきます（申し訳ありませんが、手数料は個人負担とさせていただきます）。

〔会費〕 正会員 ：5000 円
 学生会員：3000 円
 賛助会員：20000 円

《学会預金口座》：三菱東京 UFJ 銀行 江戸川橋支店
 普通預金 1017574 言語文化教育学会

提出先住所（郵送の場合）：〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育総合学術院 福田育弘研究室内 言語文化教育学会事務局

提出先（スキャナー取り込みファイル添付の場合）jatlac@gol.com

- ・ 入会関係書類発送、送金の際には、事務局宛、メールで必ずご連絡ください。
- ・ 入会に入会申込用紙、会員登録用紙の提出、および会費の納入をもって完了するものといたします。折り返し事務局より手続き完了のご連絡をいたします。
- ・ 振り込みの明細書をもって、領収書とさせていただきますが、学会発行の領収書が必要な方は事務局までお申し出ください。
- ・ 学生会員の入会申込、更新にあたっては、学生証のコピーなど学生であることが確認できる書類を提出していただきます。学籍を確認できない場合は、正会員扱いとなりますので、ご了承ください。

問い合わせ先：言語文化教育学会事務局（jatlac@gol.com）

〔学会より〕

- ・ 学会誌のオンライン版がご覧いただけます。

学会誌のオンライン版を、学会ホームページに掲載いたします。特別号も掲載されておりますので、ご参照ください。

《オンライン版》ISSN 2186-6201

(URL: <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/index.htm>)

- ・ 2016 年 6 月より以下の要領で第 16 回大会個人発表の受付をいたします。

言語文化教育学会大会個人発表 申し込み要領

- ・ 発表者は本学会会員、もしくは会員の推薦を受けたものとする。発表者を推薦する学会員は、その発表者にかわり、学会へ発表の申し込みを行い、発表当日は紹介者として、その発表の司会進行を行う。
- ・ 発表内容は、言語文化教育に関するもので、未発表の内容に限る。
- ・ 発表、資料、発表概要とも、使用言語は日本語とする。
- ・ 発表の時間は、質疑応答も含め一人 30 分程度とする。
- ・ 発表を希望するものは、8 月末までに 1000 字程度の発表概要と共に、事務局宛に発表を申し込むこと。発表概要は、メールの添付書類で送付するものとする。提出ファイルの形式は、ワード、テキスト、pdf ファイルのいずれかとする。
- ・ 理事会は発表の内容を審査し、9 月下旬までに事務局より採否を通知する
- ・ 審査に通り、発表が決定した者は、10 月下旬（期日は後日確定の上ご連絡します）までに、予稿集原稿を事務局宛添付ファイルで送ること
- ・ 口頭発表を行った者は、学会誌および学会誌オンライン版向けに発表を報告する文章（A4、4 枚程度）を、翌年 1 月末までに提出しなければならない。
 - 体裁：全角 40 字 40 行、MS 明朝 11 ポイント、英文の場合、Times、11 ポイント（英語以外の外国語の例文等を掲載する場合は、この限りではないが、ポイントは 11 ポイントとする）四方に 20 ミリずつの余白を取る
 - 白黒に限る
 - 原則として、マイクロソフトワードの doc もしくは docx ファイルと、pdf ファイルの両方で提出

・ 学会誌第 11 号論文募集

以下の要領で、学会誌の論文を公募致します。多数の方のご応募をお待ち致しております。

- ◇ 論文を応募する者は、言語文化教育学会の会員であること。
- ◇ 論文の内容は、言語教育に関するものであること。
- ◇ 未発表のものに限る。
- ◇ 論文執筆の為の使用言語は、原則として日本語とする。
- ◇ 論文の体裁は以下のように統一すること。
 - 長さ：資料・参考文献を含めて 15 枚以下
 - 体裁：全角 40 字 40 行、MS 明朝 11 ポイント、英文の場合、Times、11 ポイント（英語以外の外国語の例文等を掲載する場合は、この限りではないが、ポイントは 11 ポイントとする）四方に 20 ミリずつの余白を取ること
 - 白黒に限る
 - 原則として、マイクロソフトワードの doc もしくは docx ファイルと、pdf.ファイルの両方で提出
- ◇ 締め切り：2016 年 11 月末
- ◇ 学会は、提出された論文に関して審査し、2016 年 12 月中に応募者に採否を連絡する。

・ 訃報

本学会発起人として学会発足に尽力され、学会発足後は理事として学会の発展にご活躍くださった青山学院名誉教授、中田清一先生が、2015 年 8 月 28 日逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

- ・当学会に対するご意見、ご要望等は、学会事務局宛 E-mail でお知らせください。
- ・学会企画に関するお問い合わせも、事務局まで、E-mail にてお願いいたします。

言語文化教育学会事務局

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育総合学術院 福田育弘研究室内

E-mail : jatlac@gol.com

ホームページ : <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/>

言語文化教育 通巻第 10 号

ISSN 2186-6198

《オンライン版》ISSN 2186-6201

(URL: <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/index.htm>)

JATLaC Journal No. 10

2016 年 3 月 30 日発行

発行者：言語文化教育学会 代表者：矢野安剛

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育総合学術院 福田育弘研究室内

E-mail: jatlac@gol.com

HP: <http://www.waseda.jp/assoc-JATLaC/>

